



I ッ セ イ

東方アレンジ音楽と 一般音楽の境界 - 前編

Black

BlackAsh <http://blackash.net/>

目 次

<[はじめに](#)>

<[電子音楽 - ダンス系](#)>

[[テクノ](#)] [[エレクトロ](#)] [[トランス](#)] [[ハウス](#)]

[[ユーロビート](#)] [[ハードコア / ハッピーハードコア](#)]

[[ブレイクビーツ](#)] [[ドラムンベース / ブレイクコア](#)] [[ダブステップ](#)]

[[ヒップホップ / R&B・ソウル](#)] [[レゲエ](#)]

[[ミニマル](#)] [[アンビエント / チルアウト](#)] [[カフェ・ラウンジ / エレクトロニカ](#)]

<[チップチューン / ゲームミュージック](#)>

<[おわらない](#)>

はじめに

「ねえ、どんな音楽聴くの？」

この無邪気な問いかけがどれだけ人を悩ませてきたか。この稿をご覧になっている皆さまは、身をもってそれを知っていることだろう。自分が聴く音楽や歌手のことを話し相手が必ずしも知っているとは限らない厳然たる恐怖。会話を成立させるために何とか説明しても、音楽の専門家でない我々はうまく言葉にすることができない。要領を得ない説明に何だかうやむやのまま話が終わった時の気まずさつたらない。だいたい、2009年国内商業ベースだけでも18,660タイトルの新譜CDやLP、カセットが発刊されているのだ¹。各々が限られた時間の中、それこそ星の数ほどある音楽²について、話し相手と知識がかぶる可能性は決して高いとは言えない。

ましてや、一般社会で知名度が皆無に等しい同人音楽を聴いている我々は、この絶望を前にして立ちすくむしかないのである。

それでも勇を鼓して自分が聴いている音楽を説明せんとした者の末路は… そう、今この稿を読んでいるあなたの目の前にいる勇者、いや愚者が、まさに神を試みんとしたいやこれは私の友人の話でね？ ちょうど職場にオタな同僚がいてね。飲み会で偶然ね、顛末を見たんですよ。いやホント。

上司「きみはいつも何を聴いてるんだい。音楽好きなんだね」

●lack「ええ、何でも聴きますよ。ポップもロックも、メジャーでもインディーズ³でも」

上司「へえ。インディーズってのはどこに売ってるの？」

B●ack「あ、えーと、自主流通を扱うCDショップ⁴とか、イベントで手売りとか」

上司「へえ、イベントとか行く暇あるの。ふーん⁵。普通のとは何が違うの？」

Bl●ck「まあちよつとこう声がきゅんきゅんしてたり」

上司「なにそのきゅんきゅんって。聴かせてよ」⁶

盛大な墓穴である。

上に挙げた例を見るまでもなく、同人音楽とりわけ東方アレンジともなると、説明するのに多少の困難が伴うことは否めない。原曲があって、それは商業ベースではない同人ゲームの音楽で、それを有志が自由にアレンジして、などの文化から説き起こす⁷と、そもそも話が通じない。迷える子羊たちは、どうしたらいいのだろうか。

そのための一助をここに提案しよう。自分が好きな東方アレンジっぽい一般曲をいくつか把握しておけば、すぐに話が終わることはないはずだ。一般人を装って「●●な感じの曲とかですかね」みたいな具体的な返しがあればいい。

脚注

1. 一般社団法人日本レコード協会各種統計
 2. 調べてみたら銀河系には2000億～4000億個ほどの星があるそう。さすがにそこまでは。
 3. 同人とインディーズが違うことくらいわかってる、はずですよその友人も。仕方なかったんや…
 4. とらのあな、メロンブックスなどを指す。いやわかってる仕方なかったんや…
 5. 3日後、分厚いバインダーが3冊なぜか私の椅子の上に置かれていた。
 6. 上司「(4分間完走！ 後) は一、すごいねこれ。こんなすごい聴いたの初めてだよ」
Bla●k「あの、これはパチスロの曲でしてね、その」
上司「あれ、きみパチンコやらないよね」
Blac●「あ、はいやりませんけども」
上司「何でやらないのに持ってるの？」
最高の穴掘り職人ここに爆誕である。
 7. でもあべにゆうぶろじゅくと大好きです。新譜も買ったよ！ 以前コミケave;newブースでTシャツを含めたセットを買ったんですが、多分白沢嬢だと思うんですが、少しばかり恰幅のよい私を見た瞬間「あ、スタッフ用に作ったXLサイズがまだひとつだけあるんですよ！」と素晴らしい心遣いをいただき感謝しております。その時は感動に打ち震え、XLでもサイズちょっと厳しいですとは言えませんでした。あ、友人が。
7. そもそも同人音楽は録音媒体としてのCDが一般に十分に膾炙していない80年代中ごろから、コミケでテープに自分たちの作った音を録音して会場限定で聴かせていたゲームミュージック関係の参加者たちによりその産声を上げたと得意顔で語り始めると間違いなく別の意味で話が終わる。

その返しに食い付く相手であれば「おおそれじゃあ××って知ってる？」とくるだろう。「知らない教えて」と言っておけば話は勝手に続いていく。もしこちらの返しに相手が食い付かなかったとしても、こちらの責めに帰すべき事情で話が終わったわけではない。ひいては無趣味というレッテルを貼られることはない。古今東西、無趣味であることに対する風当たりが強烈であることにも鑑みれば、そして人が社会の中で生きていくことを選択した以上は、やんぬるかな、この程度の努力は必要なのである。

そしてこのエッセイは、それを具体的に手助けしたいという意図の下に書かれた。つまり、以下に東方アレンジで見られるジャンルとそれに属する著名なサークルを挙げ、ジャンルごとに一般曲で有名そうなものを、ついでに東方アレンジ聴きが好きな曲調のものを、まとめて紹介した⁸。これは私の輝かしい徳となり、この稿を収めたCDジャケットを飾る映姫さま⁹は必ずやご満足されるはずだ。私が今までに犯してきたちょっとした茶目っ気による所業¹⁰など水に流して下さるはずである。これは全力を尽くさざるを得ない。

とはいえ私は音楽の専門家ではない。ただ広く浅く音楽が好きというだけで、以下のジャンル分けとその説明は必ずしも正しいとは限らない。また、ジャンル分けと一般曲選択の段階で、私の主観に基づき多少東方アレンジ諸作品の傾向に寄せている。音楽に詳しい方は「この曲がない！」などということもあるかもしれない。それは私の限界として、次の稿に活かしていきたい¹¹。

それでは、一般人を装うための研鑽を積むべく、気合を入れていざ行ってみようとしよう。

電子音楽 - ダンス系

のっけからどうしたらいいかわからない。テクノとか余りにも広すぎるでしょう？ しかも何だかとおつきにくいジャンルでしょう？ クラブでダンスとかリア充のやることでしょうか？ と思いきや、最近は東方アレンジで名を上げたアレンジャーの方々がクラブでDJしたり、ライブの舞台上で盛り上がっているらしい¹²。私は「前にヴェルファアレってクラブが六本木にあってね」などと懐かしげに語る¹³ヴェルファアレ世代である。何度かヴェルファアレで身体を揺らしつつカクテルをあおっていたこともあるが、ここ数年は多忙も相俟って基本的にインドアになってしまった。今となっては、さすがにもう10も15も下の若者と張り合おうなどとは思わない。「Francois K. : HeartBeat Presents Mixed by Francois K. x Air」¹⁴あたりを深夜に家で聴きながらゆっくりウィスキーを舐める¹⁵程度にはテクノ好きである。そんな私が、2002年ごろから東方アレンジの電子音楽ダンス系をざっと聴いてきて、基本的に初心者向けに、かつ東方アレンジの傾向に合わせてジャンル分けをした結果、「テクノ」「エレクトロ」「トランス」「ハウス」「ユーロビート」「ハードコア/ハッピーハードコア」「ブレイクビーツ」「ドラムンベース/ブレイクコア」「ダブステップ」「ヒップホップ/R&B・ソウル」「レゲエ」「ミニマル」「アンビエント/チルアウト」「カフェ・ラウンジ/エレクトロニカ」という結果になって多いよすぎるよ！ こういう過度に細かいジャンル分けがとおつきにくさの原因のひとつだろう¹⁶。作り手のアピールやマーケット戦略として「他とは違う」的な印象を前面に押し出す必要があるのはわかる。しかし、細分類のさらに細分類も現れて、それぞれのジャンルを横断するミュージシャンも多数。私も何が何だかわからない。

8. ただ、個人的には、ジャンル分けは「音楽の作り手」と「この手の文章を書く書き手」だけが気にすればよく、聴き手はそんなことは気にせず好きな音楽を楽しめばよいと思う。聴き手にとってのジャンル分けは、当たりの音楽に出会う確率が少しばかり上がる程度のもので、逆にジャンル分けにこだわりすぎて美味しい音楽を逃すことだってあり得るのだから。
9. 本日9月7日ジャケット入稿完了とのこと。間に合うのこれ？ 本当に映姫さまがジャケットを飾ることを切に祈るのみである。
10. 「映姫さまの胸はもう少し小さいかも」と絵師さんに注文してしまい本当にすいませんでした。
11. その他注意事項として以下のとおり。
 - (i) ハイパーリンクによる試聴は、公式 youtube、公式 VEVO、公式 MySpace その他公式試聴と確認できたもの、そしてダウンロード販売サイトの試聴に限定する。試聴がないものについては公式サイトやCD販売サイトで確認できればハイパーリンクを張る。各自自己責任により必要に応じてのご確認をお願いたく。
 - (ii) 上記 (i) の方針により、試聴できる曲は必ずしもフルバージョンではない。
 - (iii) ジャンル分けについて、極端な細分化は不要と判断し、一般的なダウンロード販売サイトの記載を参考にした。ジャンルの説明は wikipedia 以外にも様々な文献を参考にした。
 - (iv) 専門用語は極力使わないか、使う場合は説明を脚注に記載する。読んでいてわからないから。一部の専門用語を一般的な表現に置き替えているが、稚拙なものだとしてもご容赦願いたく。
 - (v) 曲の選択、紹介、感想は全て私の主観に基づき、エッセイの目的を重視して記載した。
 - (vi) セディーユ、アクサン・テギュ、ウムラウトなどのアクセント記号は全て省略した。
12. 東方アレンジ系専門の「[音盤夜行](#)」、参加DJのメンバーは東方アレンジサークルが多い「[technoA](#)」などは定期的に開催されている。年1回というくりで見ると、東方系なら「[フラワリングナイト](#)」、アニソン系なら「[ちよっかな](#)」などに東方アレンジサークルの名前を見かける。そういえば「フラワリングナイト 2008」には行った。熱さに負けて後ろの方でVIP席の神主を何となく見上げることに終始した。
13. 今は昔、寿理穴東京といふものありけり。お立ち台に立ちて扇子を振りつつ、男の軟派を待ちにけり。名をば、わんれんぼでこんとなむいひける。
14. Francois K. (フランソワ・K) は以下に紹介するハウス系DJの超大御所。もう30年以上クラブの最前線に立ち続けているはずである。最近は宇宙を漂うような深く暗いDJミックスを手掛けており、私の好みに思い切りストライクである。このDJミックスも、世間的には余り評価は高くないようであるが、酒を飲みながらハマると本当にあつという間の77分が楽しめる。なお「DJミックス」とは、DJがターンテーブルやパソコンなどを使って複数の曲をつなぎ、まるで1曲の作品のように仕上げていくプレイのことをいう。
15. 今この原稿を書いている時のグラスの中身は「[ラフロイグ 10年](#)」、まさしく正露丸と言ってよい独特の香りが好き者にはたまらない。いや、正露丸で驚いてはいけない。80年代の「ボウモア」はまるでおしろいを飲んでいるような強烈な化粧香がだな…
16. しかもそれを突つつく人の多いこと多いこと。私もかなりライトなテクノ好きなので、余りいじめないでほしい。

まあとりあえず分けてしまったものはしかたがない。それぞれ典型的なものを紹介するので、聴いてもらえば違いはきつとわかるはず¹⁷。それでは行ってみよう。

[テクノ]¹⁸

電子音楽の打ち込み手法によりクラブで踊るために作られたリズムとビートの淡々とした繰り返しが特徴¹⁹で、以下に紹介する他のジャンルに当てはまらないものを念頭に置いている。まあこれはもう聴いてもらった方が早い。東方アレンジで例を挙げるならば「荒御魂 : SpellTech シリーズ」の反復系リズムの曲、より具体的に言うなら「[荒御魂 : SpellTech3](#)」のうち 1 曲目から 11 曲目まではテクノである。また「[POCKET AD : 東方ノイジーエレクトロ](#)」のうち 5 曲目はテクノと言える。と思う。踊りやすいように一定のリズムでフレーズが繰り返されるところに着目してもらいたい。

ただ、東方アレンジではこの手の繰り返しを基調とするテクノ系は余り多くないように見受けられる。やはり「曲が長い」「繰り返しばかりで退屈」という印象²⁰で敬遠され、需要が低いのではないだろうか。

しかしながらクラブにおけるテクノの需要はまだまだ高い。その嚆矢とも言っているのが 1988 年に発表された「[Rhythm is Rhythm \(Derrick May\) : Strings of Life - Original Mix](#)」である。もう 20 年以上も前の曲なのに未だクラブでかけられると観衆がどっと沸く名曲中の名曲、上の方できらきらと不安定に響くシンセが幻想的だ。もうひとつ穏やかな系統なら、追って紹介するハウス寄りではあるが「[Paul Kalkbrenner : Platscher - Original Mix](#)」もふわふわと踊れる。さらにハウスに寄るが「[Cirez D : Glow - Original Mix](#)」は軽めだがやや不気味系。

音が重い感じのだと「[Adam Beyer, Alan Fitzpatrick : Human Reason - Original Mix](#)」はシンプルなビートの繰り返しがじんわりと効いてくる。さらに重め、これをいわゆるハード・テクノ²¹まで進めると、「[Cari Lekebusch : Steka A Hala - Original Mix](#)」は常識外のリズムに脳味噌が溶ける。ゴウゴウと唸るような感じになると「[David Moleon : Cagliari - Original Mix](#)」で、このあたりは一般的に厳しいかもしれない。趣向を変えてダルダルな感じのダブ・テクノ²²は「[Mikkel Metal : Kenton - Original Mix](#)」の空間的に揺れながらも淡々としたビート、そしてじんわりと包み込んで浸食される「[Lucy : Kalachakra - DVS1 Eyes Closed Remix](#)」あたりで書きながら眠くなってきたのでこのへんで止めておこう。

テクノの舞台で活躍している日本人も多い。古くは、もしかしたら名前を聞いたことがあるかもしれない「[Ken Ishii : Extra - Original Mix](#)」は、当時では斬新なアニメ PV と合わさって「Japan」を世界のテクノシーンに刻みつけた。「電気グルーヴ」の核である石野卓球は、海外では Takkyu Ishino としてのテクノ DJ の側面が有名で、例えば「[Takkyu Ishino : In Yer Memory](#)」は古い曲ながら未だにパワフルである。DJ ミックスでは「[Fumiya Tanaka : I am not a DJ](#)」が激しいトラックを惜しげもなくつぎ込んだ名作だ。最近では「[Go Hiyama : Kakeru - Original Mix](#)」もシンプルで激しいテクノを作っている。

以上、一口にテクノと言っても様々で、余りにも色々な音作りがあり過ぎてどうにもならない。それでも何とか東方アレンジ好きな方もいけるんじゃないか的なテクノとして「[Yoshinori Sunahara : Lovebeat \(Not Space\) -](#)

17. 試聴につき、しばしば [Beatport](#) や [Juno Download](#) などの海外のクラブ系ミュージックダウンロード販売サイトにリンクを張っている。時々登録を要求するメッセージが出てくるかもしれないが、無視しても試聴は可能である。ただ、CD で手に入れることのできる曲が少ないこともあり、もし気に入ったら登録してみてもいいかもしれない。英語だが、登録する内容は普通の通販サイトと同レベルである。
18. 歌モノのいわゆる「テクノ・ポップ」はエレクトロの項でまとめて紹介する。
19. 盆踊りの曲も踊りやすいようにリズムは一定であり、繰り返しのフレーズも使われる。盆踊りはテクノなんや…！と思ったら[神戸で本当にやっていた](#)。「テクノ盆踊り」だそうだ。曲も聴いたが、民謡のゆったりめトライバルテクノ（民族風テクノ）アレンジだった。
20. 実際、家で聴いていると確かに単調で眠くなってくることもある。しかも日本は密集した住宅環境で、重低音が響くこの手の楽曲を大音量でかけるなどもってのほかである。しかし、ことフロアで踊るとなるとこの単調さが効いてくるのだ。
21. ハードな音遣いのテクノ。他に言いようないじゃないか… キック（ドラムセットのうち足でペダルを踏んでどんどこ叩く低音ビート）にノイズが混ざったりする。
22. 「ダブ」とはエコーやリバーブなど特殊効果を効かせて楽曲を作る技術というイメージ。ブワブワになったりぐにょんぐにょんになったりダルダルになったり、いろいろな効果がある。

[Original Mix](#)」²³を紹介してみる。砂原良徳は、かつて「電気グルーヴ」のまりんとして名曲「Shangri-La」を作り上げた。少しダウンテンボ気味ではあるが、ゆったりと音の少ない展開が私は大好きである。

最後に、少し前から東方アレンジでその名を冠する作品を見かけるようになった「シュランツ」というハード・テクノから派生したカテゴリを紹介しておこう²⁴。以下に紹介するハードコアよりも激しくはないが、ハード・テクノよりも激しい、といった立ち位置であろうか。音が全体的にゴウゴウに加えてピキピキと張りつめている。東方アレンジでは例えば「[Lolita Comp Records : 東方酒乱集](#)」が全曲このジャンルになる。代表的なアーティストは「[Felix Krocher : High Pressure – Original Mix](#)」や「[Boris S. : Candyman – Original Mix](#)」²⁵あたり。ハードコアよりも激しくない、といっても相当にハードな音だ。しかし一度ハマると「やだっかっこいい…」となってしまう²⁶のがこの手の曲である。

[エレクトロ]

このジャンルほど説明に困るものもない。あるところではテクノ以前の電子音楽の総称、またあるところではシンセサイザーの名機「Roland TR-808」をメインに使用した電子音楽、さらにあるところではテクノから分岐したポップ的な電子音楽の総称、ついでに現代日本ではキャッチーな電子音楽のメロディにボーカルを乗せたポップス系音楽のことを指すなど、何をどうしたらこうなったという多義性を持つ用語である。

いろいろ歴史について説明してもこの稿の目的から外れてしまうので、というか突っ込みが入ることは間違いないので、以下私の独断で、ここでは「テクノから分岐した電子音楽で、テクノほど反復やハードな音が使われない(=ストイックでない)もの」としよう。そして、東方アレンジで大人気の電子音楽系歌モノは「テクノ・ポップ / エレクトロ・ポップ」として本項で紹介する。

東方アレンジで概観するならば、女性のみならず男性ボーカルもかつ飛ばすキャッチーな「[Cool&Create](#)」は古くからテクノ、エレクトロ系のアレンジをしていた。他にも「[Sync Arts](#)」「[C-Clays](#)」「[舞風](#)」の歌モノ、小宮真央とのエレクトロ・ポップが記憶に残る「[Siestail \(Silly Walker\)](#)」など、枚挙に暇がない。具体的な例を挙げるならば「[Liz Triangle : Who Killed U.N.Owen](#)」²⁷「[Syrup Comfiture : Love Buzz!](#)」などはこのジャンルに該当する。見る限り相応にエレクトロ・ポップ寄りだ。やはりテクノほどハードではない聴きやすい音遣いが受けているのだろう。

それでは、一般のエレクトロのうち、インストモノをまず見てみよう。古くはシンセサイザーが一般に定着する以前の「[Perrey & Kingley : Baroque Hoedown](#)」²⁸は、皆さま必ずや一度は耳にしたことのあるメロディ、そう、某ネズミー的テーマパークのエレクトロ何とかパレードテーマの元ネタである²⁹。大御所として「[The Art of Noise : Moments in Love – Original Mix](#)」はキャッチーで聴きやすい。こちらは大御所の「[Boys Noize : Starter – Original Mix](#)」はややノイズでストイックなエレクトロである。ディーブで硬めのエレクトロとして「[Drexciya : Hydro Theory – Original Mix](#)」³⁰は、タイトルのとおり海の神秘的な深さと広大さが想起されるかっこいい作品だと思う。さらに新しいタイプのエレクトロになるともっと深くなっていて「[GOLDEN BUG : Disco Sensation – Original Mix](#)」のような低音を強めたフロア用のダンスブルな曲調になっていく。

23. Yoshinori Sunahara 名義の「Lovebeat」というタイトルの曲は2つあるので要注意。まるで別物。
24. 海外では単にハード・テクノで通っているようである。
25. 上で美しく響くピアノに何というビートとベースを合わせるのだろうか。こういう上モノと低音部分が乖離した曲は面白くてたまらない。例えば下で紹介するドラムンベースというかドリルンベース筆頭、無邪気なメロディにぶっ壊れたドラムが発狂的な「[Aphex Twin : Girl/Boy Song – Original Mix](#)」とか。
26. 1年ほど前にハマった。しかしすぐに疲れてしまった。年を取るとハードな音が聴けなくなってしまう。このままだと演歌に行きかねない… あ、数年前にアメリカの演歌とも言われるカントリー・ミュージックの Taylor Swift のアルバム買ったわ。もうダメか。ダメなのか。それにしてもテイラーちゃんかわいい><(全然ダメじゃない)
27. 全曲クロスフェード 3:30 から。
28. 試聴はちょっと怖くて紹介できないチキンですいません><
29. 某ネズミー的テーマパークはこの曲を当初無許可でパレードに使っていたらしい。来園して自分の曲がかかっているのに気付いたPerreyはびっくり仰天だったそう。全く自分の著作権にはあれだけうさいく s おっとこんな時間に誰か来たようだ…
30. 全ての楽曲のコンセプトを「海」特に深海的なディーブな音遣いで統一し、海の雄大さとそこに潜む恐怖を表現している。

日本人では、フジロックにも出演した「[DEXPISTOLS『SEBASTIEN TELLIER : DIVINE - DEXPISTOLS Remix』](#)」は追って紹介するブレイクビーツ風のドラムの刻みがパーティで盛り上がる。ややノイズではあるものの「[80kidz: Disdrive - Original Mix](#)」は聴いていて太いシンセサイザーが前面に出て気持ちいい。邦楽はまだ全然死んでいない。

さて、皆さまお待ちかね、といったところ、歌モノの紹介である。まずは海外から、超大御所は除いておいてと言いつつも、日本三大妖女³¹ ラスボスの黒柳徹子と大激戦を繰り広げた「[Lady Gaga : Poker Face](#)」³² は近時のエレクトロ・ポップ筆頭であろう。いろいろ批判もあるが、私は「[Britney Spears : Circus](#)」³³ は何だかんだでコケティッシュな魅力満載、希代のパフォーマーだと思っている。最近出てきた「[Little Boots : Remedy](#)」は何たってヴィクトリア・ヘスキスの愛らしさがたまらない。イギリスからは2009年「[La Roux : Bulletproof - Original Mix](#)」³⁴ がキャッチーなピコピコ系エレクトロ・ポップでヒットを飛ばした。もうひとつイギリス出身の「[Goldfrapp : Rocket](#)」³⁵ は、日本で人気がないのが不思議なくらいきっちりとしたテクノ・ポップである。また、私が大好きなので「[Andain : Promises - Original Mix](#)」³⁶ の最新バラードも。しっとりとしたメロディ、オルゴールのような上モノに美しいボーカルと三拍子揃った素晴らしい曲だと思う。

女性ボーカルばかりなので男性も2つほど。「[Owl City: Fireflies](#)」は近時の大ヒット、キャッチーなメロディにエフェクトをかけたボーカルはなかなかの出来栄だ。さらに最新の「[Mika : Elle Me Dit](#)」はフレンチっぽい味付けがノリノリだ。

日本でもテクノ・ポップ / エレクトロ・ポップは大量に作られている。その嚆矢はご存知 Yellow Magic Orchestra であるが、こちら「[P-MODEL : 2D or not 2D](#)」³⁷ は1992年当時余りに革新的で、時代が平沢進についていけなかった名曲である。YMO つながりでも古めの作品をひとつ挙げると「[中谷美紀 : クロニック・ラブ](#)」³⁸ はきれいなエレクトロ・ポップと言えよう。もっとハードでガチンコなテクノ・ポップを挙げるなら「[篠原ともえ : ウルトラリラックス](#)」³⁹ は、電気グルーヴの石野卓球による強い低音が心地いい。メジャーどころをもうひとつ、「[Tommy February6 : Everyday At The Bus Stop](#)」⁴⁰ も典型的なエレクトロ・ポップである。

昨今のエレクトロ・ポップブームは何と言っても中田ヤスタカの功績に負うところが大きい。「[capsule : Super Scooter Happy](#)」は見事なアッパー系。なぜ capsule のセールスが余りよくないのか、本当にもったいない。そして忘れてはいけない「[Perfume: ポリリズム](#)」の大成功はエレクトロ・ポップ復権を J-POP 界に刻みつけた… はずであったが、高野健一プロデュースによる「[Mizca : ダメよ♡](#)」のキラキラ系エレクトロ・ポップはセールス的には余り伸びなかったようだ。時代は中田サウンドなのか、最新の「[きゃりーぱみゅぱみゅ : PONPONPON](#)」⁴¹ は、奇妙奇天烈なPVが海外でも「Japan!」と評されていた⁴²。

メジャーシーンを追ってきたが、私が好きなのはネオ渋谷系⁴³ のピコピコしたテクノ・ポップである。上に挙げた capsule の他に、これならいけるとするものとして「[HNC \(Hazel Nuts Chocolate\) : Love+Piece+Ice Cream!](#)」や「[Plus-Tech Squeeze Box : Starship.6](#)」あたりはいかがだろう。特に後者 Plus-Tech Squeeze Box の「ぶっ壊し感」はなかなかテクノしていると思うのである。

31. 松田聖子、由美かおる、黒柳徹子。異論は認める。
32. サビの「Can't read my, Can't read my」が「きゅうりうまい、きゅうりうまい」に聞こえる。
33. 「[Toxic](#)」と「[Womanizer](#)」とこれで3日3晩悩んだ。結局全部にリンクを張った。
34. メイクのせいでエキセントリック気味だが、ボーカルのエレノア・ジャクソンの素顔は結構かわいい。
35. ボーカルのアリソン・ゴールドフラップは、私より圧倒的に年上とか信じられない美人っぷりである。なお、さきほどから感想がビジュアル面に偏っているのは気のせいである。
36. たくさんトランスアレンジされてクラブで大ヒットした。「[Andain : Promises - Gabriel & Dresden Remix](#)」は特におすすめ。まあ Gabriel っつてもそもそも Andain の作曲担当メンバーで、トランス、プログレッシブ・ハウス系のDJですが。何という自炊。
37. [P-MODEL](#) はご存知「けいおん!」の各主人公の名字の元ネタということで、皆さまも名前だけは聞いたことがあるかもしれない。ソロになってからの平沢進も相変わらず革新的で、「[世界タービン](#)」を始めとした楽曲は間違いなく平沢ワールドである。おすすめ。
38. 坂本龍一プロデュースのこの曲は、同じく坂本龍一プロデュース、悲運という言葉では語り尽くせないあの「岡田有希子: Wonder Trip Lover」を坂本がセルフカバーした「坂本龍一: Ballet Mechanic」のさらにカバーである。岡田有希子のことを思い出すと涙がにじんでくる。
39. 篠原ともえは2005年にこの曲を引っ提げてフランスに行き、あのころのスタイルまんまでライブをかつ飛ばした。フランスでは当時、この曲を主題歌にしたアニメ「こどものおもちゃ」がヒットしていたのである。
40. 私はこの曲の振り付けを憶えた。トミフェブ出演のライブ番組を何度も録画し、映像を何回も食い入るように見詰めた。断じて川瀬がかわいかったからではない。そして飲み会で上司の前、本を投げるころまでぼっちりと仕上げて踊った。勢い余って投げた本でグラスを割ったが、それなりに好評だった。
41. ヘビーなサウンドに甲高いラップと過激な言動で人気を博し、このたび10年ぶりにオリジナル・メンバーが揃っての新譜を出したアメリカのメジャーロックバンド「Limp Bizkit」のボーカル Fred Durst がツイート (8月4日) してるとかね、笑うほかない。
42. [Yusef Watches きゃりーぱみゅぱみゅ - PONPONPON](#) 日本は海外からこんな感じで(生) 温かく見詰められている。
43. いろんな洋楽の美味しいところを J-POP に取り入れて再構築し、80年代後半から90年代前半に渋谷を中心に流行った、ちょっとスカしたおしゃれな感じの「渋谷系」を聴いて育ってきた若手が、それに影響を受けて作っている作品の総称。いや、フリッパーズ・ギター大好きなもんで。

〔トランス〕

東方アレンジでよく見かけるジャンルのひとつである。基本的に楽曲は長め⁴⁴で「どんどんどん」と4分の4拍子、いわゆる「四つ打ち」のビートと、途中でそのビートがなくなって緊張感や静謐感を醸し出すフリーズ⁴⁵があるのが共通した特徴であろうか。トランスにもまたぞろサブカテゴリがあって、以下「エピック/アップリフティング」「ゴア/サイケデリック」「テック・トランス」「プログレッシブ・トランス」で音の傾向がそれなりに違うので、東方アレンジの有名どころを挙げつつ説明していこう。

なお、以下の4つがだいたいまんべんなく入っている東方アレンジアルバムとして「[Code49: Cantrip](#)」を紹介しておく。ほんと「ゴア/サイケデリック」が少ないんですよ、東方アレンジ。

〈エピック・アップリフティング〉⁴⁶

四つ打ちのビートにきらきらピカピカしたキレイめのシンセサイザーのメロディ、分かりやすい壮大な曲調、途中ビートがなくなって静かになり、そこから徐々に盛り上がってそして天空に突き抜けていくような「しゅわ〜」という雄大または透明な展開がこのサブカテゴリ。まるで幼稚園児のような文章に唖然とした。とにかく高揚感による陶酔を目指す傾向で、しばしばボーカルもついている。非常に聴きやすくノリやすい曲調である。

東方アレンジでは、明確にこのサブカテゴリで統一されたアルバムが少ない。ほぼ見かけないと言ってもいいのではないか。「しゅわ〜」的展開が派手で私も大好きな「[Levo Lution](#)」は「[Levo Lution : Skyrise](#)」の2曲目がこれに近いと言えるが、それでも以下に紹介するプログレッシブ的要素が多めではある。古いものだと「[Ripple Tale : 少女と夢人形](#)」の1曲目2曲目がこれに当てはまりそうだ。

なぜか、理由は明確だろう。現在のクラブミュージックの主流が「テック・トランス」「プログレッシブ・トランス」だからだ。90年代後半から2000年代初頭にかけてこのド派手なトランスは確実に一世を風靡したが、もはや完全に今は昔。ジャンルの流行り廃りはかくも激しい。東方アレンジのアレンジャーは20代〜30代前半と比較的若い人たちの割合が多く、このサブカテゴリにダイレクトに触れていないことも要因のひとつかもしれない。

それでもまだまだ一般的な需要はある。「[Rank1 : Airwave - Rank1 vs. Dutch Force Remix](#)」は、透明感いっぱいアップリフティング系屈指の名曲だ。また、最近は違うジャンルに行ってしまった⁴⁷が、若き日の「[BT : Flaming June - BT & PVD Mix](#)」⁴⁸は美しい展開に独特のリズム刻みが匠の域に達している。

おっさん乙と言われないため若手も紹介すると、「トランスの貴公子」⁵⁰として現代3大トランス系DJ⁵¹の座を確固たるものにした「[Armin van Buuren feat. Laura V. : Drowning - Avicii Remix](#)」は、キャッチーで相当聴きやすい。「[Dash Berlin feat. Emma Hewitt : Disarm Yourself - Original Mix](#)」は強めのシンセにEmma Hewittの透明な声がぴったり、Dash Berlin屈指の名作だろう。インスト中心なら、多少コーラスは入るが「[Reconceal & Andy Blueman : World To Come - Andy Blueman Mix](#)」はきれいに持っていられる。「[Arctic Moon : True Romance - Original Mix](#)」も幻想的な世界にぐいぐい引っ張っていく。

もしこのサブカテゴリに興味を持たれたなら、まずはオランダのレーベル「[Armada Music](#)」を調べると大量に掘り

44. トランスが敬遠される一因である。前振り3分とか、ポップスを聞き慣れた一般人には退屈であろう。ただそれには理由があって、トランスは人間を陶酔状態に持っていくことを目的とするので、いわゆる「溜め」を作るために尺が長くなりがちなのである。東方トランス系アレンジはそのあたりを調整し、前振りをポップス程度に収めたものが多い。

45. 「ブレイク」という。ジャンル分けの「ブレイクビーツ」とは違うので要注意。まあ皆さまが今後この点に注意すべき局面に出会う数は、持っているCDを間違って2枚買いするケースよりも少ないだろうが。私の所有するCD約4200枚のうち、2枚買いと認識できているのは20枚ほど。1%を切る、かなり低い確率である。なお、私が2枚買いを回避できている理由は、私のCD棚を私よりも把握している友人のおかげであった。イベント会場で迷うとすぐにその友人に電話して「なあ、俺このCD持ってたっけ?」とか、何かが違うような気がする。

46. 「ダッチ・トランス」「アップリフティング」「プログレッシブ・トランス」あたりの壮大荘厳なトランスをまとめて呼ぶ時に使われる用語でもある。ここで「ダッチ・トランス」とは、オランダ発祥の派手めなトランスの総称である。荘厳なメロディが特徴で、我々が「トランス」といえば思い浮かべるであろうトランスらしいトランスである。

47. BTは何でも作るので、ジャンル固定はなかなか難しい。あくまでも若き日のBTに限定ということで。

48. この「BT: Flaming June」を聴いて、かのKeyメインシナリオライター麻枝准氏は「自分の作りたかった世界観はこれだ」と思い、「KANON」「Air」に反映させたそうである。確かに曲の雰囲気は「KANON」や「Air」に似ているようだ。これに同時期に流行った「Chicane: Soltwater - Original Mix」あたりをプラスすれば、麻枝氏の言っていることがより具体化してイメージできるように思える。

49. 「PVD」とは、2つ後の脚注で紹介している現代3大トランス系DJのひとりPaul van Dykである。

50. Armin イケメンすぎてマジでばるばるしい。

51. Armin van Buuren (アーミン・ヴァン・ブーレン)、Paul van Dyk (ポール・ヴァン・ダイク)そしてTiesto (ティエスト)が現時点でトップの座を争っている。Sasha (サーシャ)はちょっと年取ったかな…

出せるだろう。ただ、ド派手な展開は東方原曲の不安定な雰囲気とはやや方向性が違うかもしれない。

〈ゴア / サイケデリック〉⁵²

トランスはトランスでも、ごりごりと身体の内側に響くような四つ打ちの激しいビートに、やや暗めの民族的宗教的または宇宙的なイメージをウネウネグリグリとしたシンセサイザーの音にして乗せた曲調である。疾走感あふれる進行に内側からずんずんと揺らされて自然に頭を振り、酒を飲んでいるとすぐに持っていかれてしまう⁵³。

東方アレンジでこの曲調は本当に少ない。そもそもゴア・トランス自体アンダーグラウンドな文化であるからしかたがない。しかし、そこに燦然と輝く「D'va : candybug」は東方ゴア・トランスアレンジとして素晴らしい出来だと個人的に思う。原曲はほぼ破壊されているので原曲重視の人にはお勧めできないが、ウネウネグネグネに浸ってみたい人はぜひとも[氏の公式サイト](#)から Discography にジャンプして聴いてみてほしい。また、「[モヒカンサンドバッグ](#)」の中期「ELECTRO ELECT」「BOSSIZM!」の半分弱はサイケデリック・トランスである。

ゴア・トランスが流行ったのは 1990 年代前半から後半であり、名曲もその時代にある。ゴア・トランスと言えばこの人「[Hallucinogen : Shamanix - Original Mix](#)」の宗教風味が色濃い疾走トラックは今聴いても全く色あせない。同じく「[Hallucinogen : L.S.D. - Original Mix](#)」も必聴。一方、宇宙に飛ばされるサイケデリック・トランスといえれば私はこの人「[Pleiadians⁵⁴ : Alcyone - Original Mix](#)」を推す。何度聴いても圧倒されてしまう。また、初心者に勧めやすいサイケデリック系の「[Astral Projection : Kabalah - Original Mix](#)」、圧倒的疾走の「[X-Dream : Panic in Paradise - Original Mix](#)」あたりは気持ちよくイってしまうこと請け合いである。

再度おっさん乙回避のために最近の作品を挙げよう。「[Dickster, Burn in Noise : Tumbleweed - Original Mix](#)」の太いシンセは迫力満点。余りに速すぎるのはちょっと、という方にはこれ系で近頃流行りの「[Neelix : Get Awake - Original Mix](#)」は多少緩やかだがしっかりハマる。また「[Day.Din : Dance With Me - Original Mix](#)」は、やや早歩き散歩にぴったりだ。

そんな感じで、余りこれ系を聴いたことのない皆さまの脳味噌を破壊するために「[Materia, Brainiac : Unsane - Original Mix](#)」のテクノ風ためシンセな宗教色皆無のサイケデリック・トランスを。展開もそれほど単調ではなく、いろいろな工夫が凝らされていると思う。ぜひとも酒をあおりながら聴いてみてほしい。

〈テック・トランス〉

テクノ寄りなトランス。他に言いようがない。まあ少し音が硬めかつ暗め、テクノ風反復が見られリズム構成も凝ったものが多いが、四つ打ちとブレイクはしっかりあり、というまとめ方でどうだろう。ヨーロッパで主流という記憶だ。

もちろん東方アレンジでもこのサブカテゴリは主流のひとつ。「[Alstroemeria Records](#)」は、硬質でストイックなこの曲調の作品が多い。特に分かりやすい具体例を出すならば、ニコニコ動画の影絵で人気を博した「[Alstroemeria Records : Bad Apple!! feat. nomico](#)」のトランスはこのサブカテゴリと言える。最近ハードコア系のようにであるが「[Rolling Contact](#)」がまだ「Angelic Quasar」だったころから「Rolling Contact」にサークル名を変えたあた

52. インド風エスニックの音色が強く宗教的なのが「ゴア・トランス」、宇宙的な音遣いが「サイケデリック・トランス」と強引に分けることはできる。

53. もともとインドのゴア地方発祥で、当時はバックパッカーたちが酒やちょっとアレな薬をやりながらゴア・トランスで陶酔状態に浸るような文化があった。それが廃れ、代わるようにして宗教色を薄めて宇宙をイメージしたサイケデリック・トランスが流行ってきた。

54. プレアデス星団のことである。まさに宇宙的。サイケデリック・トランスの雄 [Etnica](#) の別名義。

りは、暗めの曲調はこのサブカテゴリだった。「38BEETS」もこの手の作風が見受けられる。また、最近では「[The Universal Mind Records : 東方トランスネーションシリーズ](#)」が図抜けてクラブの現場に近く、当然この曲調も多く含まれている。

上で紹介した現代3大トランス系DJの一角を占めるTiestoがこの曲調である。クラシックの名曲を大胆にトランスアレンジした「[Tiesto : Adagio for Strings – Original Mix](#)」⁵⁵は、バイオリン風ストリングスからテクノ風味の音に切り替わるブレイク部分に圧倒される。同じく「[Tiesto: Elements of Life – Original Mix](#)」もしっとりとしたメロディが印象的。トランス界の重鎮「[Sander Van Doorn feat. Carol Lee : Love Is Darkness – Original Mix](#)」もしっとり系、しっかりしたボーカルがテクノ風進行に合っている。これも長いキャリアな「[Simon Patterson : F16 – Nick Callaghan & Will Atkinson 2011 Remix](#)」はリミックス陣の腕が冴え渡った抜群に重くて硬いトラックで、まさにテック・トランスである。軽めな硬さならば「[Filterheadz : Cartagena – Original Mix](#)」がすごくテクノテクノしている。最近では「[Ummet Ozcan : Reboot – Original Mix](#)」が最新、自前で開発したシンセサイザーの音がずっしり重たくてかっこいい。

まあしかしこの手で余り重たい曲調の作品は東方アレンジに少なく、東方アレンジのこの曲調が好きな人にはよろしくないだろう。そこで、こちら期待の新人「[SNR : Supercell – Original Mix](#)」を紹介して、このサブカテゴリの締めとしよう。インストではあるがほどよく展開し、テック・トランスにありがちなビートだけが3分延々と続くということはないので、聴きやすいのではないかと。

〈プログレッシブ・トランス〉

基本的にエピック/アップリフティングよりもややゆっくりめで、楽曲の構成や展開に工夫が凝らされている。ただ一辺倒にきれいめではなく、哀愁的で、時に実験的な音も試み、他のジャンルを積極的に取り入れていく感じである。じんわりと染み込んで陶酔させるトランスとも言えるだろうか。「プログレッシブ=前衛的・実験的」というイメージで捉えたと分かりやすく、全体として「前衛的・実験的でジャンルにこだわらない」という傾向がある⁵⁶。つまりは「よくわからないけどいつの間にかトランス状態!」ということではいかがだろうか。いやよくないな。神霊廟イメチェン妖夢もプログレッシブ・トランスになってしまう⁵⁷。これは… いや、むしろいい。実にいい。まあそういうことで。以下は私の独断で、基本的にブレイク後のトランス的展開、浮遊感が濃いものをここに分類した。

クラブでは最近の流行ということもあり、東方アレンジでもこのサブカテゴリは多い。「[Alstroemeria Records](#)」や「[The Universal Mind Records : 東方トランスネーションシリーズ](#)」の哀愁的な四つ打ちはこれに該当することが多い。また上で紹介した「[Levo Lutien : Skyrise](#)」の最後の曲は、空中へ吸い込まれていくような展開もはっきりと、まさしくこれに該当する。「[Sound Online](#)」の初期～中期のトランスアレンジや「38BEETS」のアレンジもこの傾向としてカテゴライズすることができる。

プログレッシブ・トランスって何と訊かれたら、直球ど真ん中「[Sasha : Xpander – 12" Remastered Version](#)」を出さざるを得ない。2000年ごろに初めてこの曲を聴いた時は唖然とした。ただひたすらに美しく染み込んで重なり合

55. サミュエル・パーパー「弦楽のためのアダージョ」が原曲。

56. 特に、追って紹介するプログレッシブ・ハウスとは境界があいまいで、どちらがどちらだかよくわからない。また、今まで述べてきたトランスの特徴のひとつである「四つ打ち」が消え、これも追って紹介するブレイクビーツのような細分化されたビートが刻まれる場合もある。

57. まったく神霊廟でのイメチェンは実にけしからぬ。頬が緩みっぱなしである。体験版で初めて見た時は、まるで[ハバネロ上司](#)のように「何これ!」「フォー!」を連呼したものである。おかげで使い慣れない妖夢で特攻してはトランス状態を繰り返して全然進めない。そして被弾して「けほっけほっ」と埃にまみれ、恨みがまじげに私をじと一と見詰める妖夢を想像するだに私がトランス状態になってますます進めない。

うシンセサイザーの音に、11 分があっさりと過ぎ去っていく。名曲である。名曲と言えばジャケット絵が歪んだ顔でちょいグロ注意な「[Hybrid : Finished Symphony – Original Mix](#)」も、ブレイクビーツ的に刻んだリズムがクラシック的な音遣いと合わさって見事にトランスさせる。もうひとつ古めのだと「[Chicane : Saltwater – Original Mix](#)」はじんわりと作り上げられる音の空間に引き込まれていく。

カッコいい系では「[Darude: Sandstorm – Original Mix](#)」、格闘家のヴァンダレイ・シウバ、そして阪神の金本⁵⁸のテーマとしても有名だろう。「[Vengeance: Temptation – Denga & Manus Remix](#)」も太めのシンセサイザーが押ししてくる。「[Gabriel & Dresden: Arcadia – Original Mix](#)」は前 2 つに比べると大人しめではあるも、低音の輪郭がくっきりとカッコいい。

歌モノなら、先に紹介したトランスの貴公子「[Armin van Buuren feat. Sharon den Adel : In And Out Of Love – Original Mix](#)」が、ブレイクビーツの刻みとキャッチーなメロディにより人気を博した⁵⁹。トランスというよりもややポップ寄りか。最近ではしっとり系の「[Yuri Kane : Right Back – Original Mix](#)」も泣きメロで素晴らしい。

こんなに色々ある中でどれをお勧めしよう。東方アレンジ聴きならインストものも耐えられると期待して、低音のラインがガチでカッコいい上にじんわりとした空間まで作り上げてしまう「[Hernan Cattaneo & John Tonks : Warsaw – Original Mix](#)」はどうだろうか。もはや完全にブレイクビーツやプログレッシブ・ハウス寄りで、トランスとは言いにくいかもしれない。でも私はこれでトランスするのだからしかたがない。妖夢がかわいいのでトランス状態になってしまうのと同じである。

トランスのサブカテゴリは細かいものを見てしまうと切りがなく、いろいろと割愛したことについてご容赦願いたい。このジャンルの最後に、太いビートとシンセサイザーでゴリゴリ迫るけれどテンポよくキャッチーなメロディで、ヨーロッパメインの「ユーロトランス / ハンズアップ」というサブカテゴリで最近のものを紹介しておこう。かなりアゲアゲな感じであるが「[Sunray vs. Turnyboy : Summertastic – DJ Giga Dance vs. Phillerz Remix](#)」は聴いていて気持ちよくなってくる⁶⁰。

[ハウス]

基本的に四つ打ち、ラテン系の雰囲気を用意、特にピアノやパーカッションを基調にして短い反復フレーズで構成された踊りやすい曲調である⁶¹。ラテン系のチャネーがビーチで水着でノリノリばいばいんやッホーみたいなイメージだ。しかしながら、ハウスも時代の流れの中で拡散と細分化を繰り返し、今やラテン系の雰囲気が皆無のものもあり、テクノと区別がつかなくなってしまった。

東方ラテン系ハウスアレンジは単曲でちらほら見かけるも、それで統一されたものは余り多くない。その中でぱったり全編ハウスしているのは「[クロネコラウンジ : House set of Retrospective 53 minutes](#)」を筆頭とした「[クロネコラウンジ](#)」の「東方ハウスシリーズ」だ。ハウスにも以下に紹介するようなサブカテゴリがいろいろあるが、このシリーズは伝統のラテン系がそこはかとなく漂う手堅いハウスアレンジである。

58. プログレッシブ・トランスを自らのテーマに使うだけあって、野球で「ショフト」という新しいポジションの誕生に一役買った前衛っぷりである。さすがアニキやで…

59. 先ほど見たらついに youtube 再生回数 1 億回を突破。良かれ悪しかれトランスというジャンルでここまで話題に上るとは、信じがたいメガヒットである。

60. 今これを書いている 8 月最終週から 9 月初週にかけて、仕事が夏枯れせず連日徹夜である。テック・トランスでテンションを押し上げて何とかしていたがとうとう気力体力ともに尽きかけ、最後の手段としてこれを聴いて今現在保たせている。今すごい頭振ってる。会社でも振ってた。サブカテゴリ名のとおり、ブレイク部分のシンセに乗せて手まで挙げてた、らこうなった。

事務の女の子「すいま s うわ、ちょっと Black さん何やってるんですか…」

Black「え、あ、その、すいません…」

事務の女の子「正直キモいんですけど、何聴いてるんですか」

Black「(やった！ 同人音楽じゃない！) いやこれはクラブ」

事務の女の子「やっぱいいです。何か聞かない方がいい気がするんで。はいこれにサインください」

一般曲を聴いていても話が續かないことがある。皆さまも重々ご留意願いたい。

61. 上で紹介したテクノはここから分岐したジャンルであることからすれば、本当はこ

まずはラテン系の香りでハウスしているものをざっと見ていく。まずは王道ハウスの直球名曲「[David Morales feat. Juliet Roberts : Needin'U II - 2001 Anthem Mix](#)」でビーチの雰囲気。ノリノリでアップーな「[Captain Jack : Captain Jack - Original Mix](#)」⁶²も、コミカルな軍隊風PVとともに踊りまくれる。妙に色っぽい「[Tim Deluxe feat. Sam Obernik : It Just Won't Do - Original Mix](#)」⁶³もラテン風味満載。「[Kimara Lovelace : When Can Our Love Begin - Richard Earnshaw Remix](#)」は追って紹介するラウンジ系のハウス。自らの名曲をセルフアレンジした「[Mory Kante : Yeke Yeke - Afro Acid Mix](#)」はハードなクラブ用の南国系ハウスである。

ここまで王道系ハウスを見てきたが、上で述べたようにハウスはその領域を驚異的なまでに広げていった。サブカテゴリとして、プログレッシブ・ハウス⁶⁴、テック・ハウス⁶⁵そしてディープ・ハウス⁶⁶は、今のクラブでは欠かせないサブカテゴリだ。

まずは東方アレンジから。新しいものを積極的に取り入れることで定評のある荒御霊、現在クラブで流行のプログレッシブ・ハウスを作らないはずがない。「[荒御霊 : Network of Progressive House](#)」は、全編クラブ系踊れるプログレッシブ・ハウスアレンジだ。引き続きどこまでやるのか「[荒御霊 : 永履明日 ~ Alias](#)」では全編ひたすらにテクノ的の反復継続が続く、暗めのテック・ハウスアレンジも試みている。また「[びずやの独房 : Shooting Star](#)」はそこはかたなくジャズっぽいテイストが漂う全編ディープ・ハウスアレンジのアルバムを作り上げている。

ここらへんになるともう何が何だかわからなくなってくる。ジャンル分けの細かさも手伝って、かなり「一般人お断り」臭が出てくるように思えるのだ⁶⁷。それでもがんばって説明すると、例えば「[DJ Dalysovich : Spanish Eyes - Original Mix](#)」や同じく「[DJ Dalysovich : Love Is Like A Violin - Original Mix](#)」はプログレッシブ・ハウスの定番、「[John Digweed : Gridlock - Digweed & Muir's Stereo Club Mix](#)」は名曲に強めの空間的効果が見事にはまった。最近では「[Deadmau5 : Not Exactly - Original Mix](#)」がプログレッシブ・ハウス系クラブで大流行、今や世界中を飛び回るDJの代表格といえよう⁶⁸。テック・ハウスになると音が少なくてもう何とも言い難いが、しかしながら「[Ame : Rej - Original Mix](#)」⁶⁹は聴いていて本当にじんわりと心地いいのだ。「[Matthias Meyer, Patlac : Salt City - Nick Curly Remix](#)」のテクノ色の強いシングルで単調なビートは時間を忘れさせてくれる。ディープ・ハウスだと有名どころは「[KASKADE feat. Joslyn : It's You It's Me - Original Mix](#)」あたり、ジャズっぽい香りが上の2つと比べて多めなことが聴いて取れるであろう。

日本人にもハウスミュージシャンはたくさんいるが、紙幅の関係にて割愛する。とりあえずは超有名どころ「[m-flo : come again](#)」はハウスの1手法「2ステップ」⁷⁰で大ヒットした初めての曲だと思う。もう少しハウスらしいところだとジャジーなピアノが印象的な「[Sakura&Co. feat. NANASE : Tears - Club Mix](#)」はラウンジ系。新しい分野では「[Ryo Murakami : In Chain - Original Mix](#)」がストイックなテック・ハウスを作っている。

これほどにいろいろな曲調がある中でどれかひとつを推せというのはどだい無理な話だ。ここは私が今好きなミュージシャン、ロシアの新鋭「[Asten : Abuqua - Original Mix](#)」のプログレッシブ・ハウスを紹介して、このジャンルを締

れを1番上に持ってくるべきだったとも言える。

62. Dance Mania で聴いたことがある人もいるだろう。メインボーカル Franky Gee の早すぎる逝去はひたすらに残念である。もうひとつ「[Captain Jack : Iko Iko - Original Mix](#)」のPVも紹介したかったのだが、Youtube で年齢制限がかかる実にばいばいんのでいやらしけしからぬPVなので泣く泣く諦める。
63. 代わりにこちらでばいばいんすることにする。
64. 上で紹介したプログレッシブ・トランスの項も参照されたい。プログレッシブという言葉のとおりハウスの中でも前衛的で、じんわりと陶酔させるような音をいろいろ取り入れている。プログレッシブ・トランスとの境界ははっきりしないが、比較的ゆったりじわじわ来る方がプログレッシブ・ハウスという捉え方もある。溜めて溜めて空間的に展開するのがプログレッシブ・トランスで、溜めて溜めてアガらずにスカッと落とすのがプログレッシブ・ハウスという見方もありかもしれない。
65. ハウスとテクノの中間っぽい曲調。四つ打ちではあるが音数が極端に減って、短いフレーズの反復に余韻や残響を加えて、音のスキマでじんわり陶酔させる方向性である。人によっては退屈だろう。
66. ハウスの四つ打ちはあるもゆったりめ、音はテック・ハウスよりは多いが少なめ、空間的に余韻を出す効果を多用して聴かせる系。ジャズっぽい香りがするのが特徴。

67. 追って紹介するミニマルになるともはや何かがおかしい。大好きだけど。
68. 「デッドマウス」と読む。ちょうど去年の今頃だったか、過労でぶっ倒れてサマソニに出演できなかった。この土日も徹夜な我が身のことを忘れて心配である。
69. 「Rej」は「レイ」と読み、日本語の「礼」から取ったとのこと。空手も嗜むなど日本大好きである。[DMR インタビュー記事](#)参照。

70. 四つ打ちのキックドラムのうち1拍目と3拍目が強調されるスタイリッシュな曲調。

める。天上で響く美しいシンセのメロディに空間的効果が重なって、どこかに漂っていってしまうような気がする。

[ユーロビート]

このジャンルほど特殊なものはないだろう。「ユーロ」とあるのに何故か日本だけで流行っているダンスミュージックである⁷¹。敢えて工夫を凝らさない単調で強い四つ打ちのビートに太く強めなシンセサイザーの音、メロディはシンプルでキャッチー、時に哀愁的。しばしば爽やかなボーカルが乗せられる。例外はあるが基本的にトランスのような空間的展開は余り見られず⁷²、最初から最後までアゲっぱなしの加速っぷり。まさに踊るためにあるような、または峠を攻めるためにあるような曲である。

一般には AVEX の [SUPER EUROBEAT シリーズ](#) がこのジャンルを下支えしていると言ってもよいだろう。また、音ゲーに加え、かなり長期にわたる連載にもかかわらず未だに人気を保つ走り屋漫画⁷³「[頭文字 D](#)」⁷⁴ がゲーム化され、ユーロビートの名曲が数多く使われたことも、クラブに行かない人口にこのジャンルを膾炙させた。さらに加えれば、ニコニコ動画で驚異的な再生数を叩き出した「[矢部野彦麿 & 琴姫 with 坊主ダンサーズ：レッツゴー！ 陰陽師](#)」は、和楽器の味付けが施されているユーロビート風である。

日本ではまだまだユーロビートの人気は根強く、東方アレンジも数が出ている。最近名を馳せてきた「[A-One : TOHO EUROBEAT シリーズ](#)」はバリバリの SUPER EUROBEAT 系、同じく「[NJK Record : Toho Euro Flash シリーズ](#)」もそれ系の曲調でぐりぐり押してくる。「[Silver Forest](#)」の作品の一部にもユーロビートが含まれている。そしてユーロビートアレンジと言えば「[SOUND HOLIC](#)」、英詞でのガチンコユーロビートに定評がある。

1980 年代からこのジャンルは徐々に広がってきた。ただ、初期のユーロビートはテンポが遅く、代表というべき「[Kylie Minogue: I Should Be So Lucky](#)」を聴いても「これポップスじゃないの?」と思う方々もいるだろう。そのカイリー・ミノグのカバーで一躍トップに躍り出た「[WINK : 愛が止まらない ~ Turn It Into Love ~](#)」⁷⁵ もユーロビートなのである。他には「[Ursula : Young People](#)」あたりもこれに含まれる。日本では、この時代の洋楽ユーロビートサウンドの中心は、マハラジャ⁷⁶ という高級ディスコだった。

90 年代に入ってユーロビートはジュリアナ東京の過激なレイヴ・サウンドに押されていたが、1994 年にジュリアナ東京が閉店、マハラジャのユーロビートが全盛期を迎えた。このあたりから高速化が定番となり、現在の曲調に近づく。「[NIKO : Night of Fire](#)」⁷⁷「[Dave Rodgers : Space Boy](#)」「[VIRGINELLE : Hot Love & Emotion](#)」は、この時代を過ごした人たちにとっては余りにも名曲すぎるであろう。「[VIRGINELLE : LIKE A VIRGIN](#)」「[Cherry : Yesterday](#)」「[Marko Polo : Money Go!](#)」など、90 年代半ばのユーロビートは今風に分厚くハイスピードにリミックスされ、最近のクラブでもかけられている。

これらのブームに乗って J-POP でも新しいユーロビートを出してきた。「[安室奈美恵 with Super Monkeys : Try Me ~ 私を信じて ~](#)」など、東芝 EMI 時代の安室奈美恵の曲はたいていユーロビートである。また、頭文字 D でも使われた「[m.o.v.e : Gamble Rumble](#)」もなかなかキャッチーでヒットした。

これらのスタイルは、多少シンセサイザーの音色が太くなり押しが強くなった程度で今も余り変わらずに、日本だけで疾走し続けている。今や大ベテランの「[VIRGINELLE : Baby Come Back](#)」もまだまだあの声は健在、頼もしいこ

71. 日本からイタリアのミュージシャンに発注され、完成したらイタリアから日本に送られる。わけがわからないよ。
72. 最近ではジャンルの境界があいまいなので必ずしもそうとは言えない。ただ、きっと皆さ疑問に思うであろう「トランスとユーロビートって何が違うん?」という問には、ユーロビート特に SUPER EUROBEAT 系と比べると、①曲の進行が定型化されている、②曲ごとに特定のシンセサイザーのメロディがサビの後で繰り返される、③基本的に一本調子（いい意味でシンプルにする手抜き感）、という回答が参考になるかもしれない。
73. 「ブッシュアアアアアッ」「ゴヒュッ」「ギョルルルル」と効果線だけで連載が成立する稀有な漫画である。コマの白地に数個ちりちりと点を飛ばすだけで背景が完成する「修羅の門」後期に匹敵するだろう。いや 2 作とも買ってますけどね。
74. 頭文字 D を電車ですってしまった同人誌「電車 D」([○急電鉄](#)) は必見。電車が華麗にドリフトします。え、どうやってだって? それは見てのお楽しみ。

75. 所属レーベルのポリスターが自社ビルを建てられたのは WINK のおかげだろう。そして私が大好きなフリッパーズ・ギターが日本人なのに全曲英詞の CD を出してデビューできたのも、WINK が稼ぎに稼いでおカネが余っていたからだろう。まさに WINK さままである。
76. お立ち台の元祖である。ジュリアナ東京のお立ち台はその後追い。また、焼いた食パンの上に蜂蜜をかけた「ハニートースト」の元祖でもある。
77. 以下公式 PV が AVEX のバラバラ練習動画しかない。ご容赦願いたい。バラバラ懐かしいなあ… 神楽坂 Twin Star とかな。しかし踊ってる人みんな真面目な顔しすぎなのではないかこの動画。

とである。

最後に、ユーロビートの前身と言っていいだろうか、脱力能天気系、とりえずみんな踊っちゃえばいいじゃん的なユーロダンス系を紹介する。ユーロビートの速く太いビートと分厚いシンセサイザーは鳴りを潜め、「[Cascada : Everytime We Touch](#)」のようなキャッチーなメロディで肩肘張らず気楽に踊れる感じである。PVのチープな能天気っぷりも好ましい「[beFour : No Limit](#)」は、ユーロダンスの中でもさらに能天気な「バブルガム・ダンス」というサブカテゴリ。また聴き慣れない用語かとうんざりであろうが、これに該当する「[Caramell : Caramelldansen - Original Mix](#)」⁷⁸という曲名に憶えがある方、ニコニコ動画で一時期どこもかしこもウウウウマウマばかりだったころを思い起こして、ほっこりしてほしい。さらにイラッと来てしまった人にはポップ色を深めた「[The Remix Cartell : Hello Partyrock - Original Mix](#)」はいかが。日本ではほとんど知られていないが、なるほどタイトルのとおり自然に踊ってしまう曲調である。

[ハードコア / ハッピーハードコア]⁷⁹

聴く人を選ぶジャンル筆頭であろう。しばしば「うるさくて速いの」とも言われがちだ。ドンドンドンドンと四つ打ちでトランスやユーロビートよりもさらに高速かつ強烈、そしてしばしば歪んだビートに、効果をかけて歪ませまくった攻撃的であったり哀愁的であったり恐怖感をあおったり、はたまた能天気なハッピー系であったり、スタイルによって様々にハードなシンセサイザーの音がギューギューと襲いかかる。ボーカルも効果をかけまくり、歌詞の内容は先鋭的、時には放送禁止用語連発というものも見受けられる。聴くのに体力と気合が必要なジャンルだ。

東方アレンジでは大御所が並ぶ。「[Cis-Trance](#)」⁸⁰は初期から一貫して哀愁的なシンセサイザーのメロディで人気も高い。東方アレンジが盛り上がってきたところに満を持して参戦した「[ALICE' S EMOTION](#)」は強烈なハードコア、ハッピーハードコアで瞬間に東方アレンジ界を席卷した。ニコニコ動画から有志の共作「[Black Onyx : Unconfirmed Music](#)」もソフトではあるがハードコア系、「[荒御魂 : SpellCore Act2](#)」はハードコア成分が高めである。東方アレンジはほとんど手掛けないが、同人音楽では「[HARDCORE TANO-C](#)」のシリーズが一般的に知られている。

この手の音楽が日本で最初に注目されたのは、またもや今は昔のジュリアナ東京である。「[L.A. Style : James Brown Is Dead - Original Mix](#)」⁸¹に代表されるいわゆる「ジュリアナ系」がこのジャンルの日本での走りだ⁸²。「[Charly Lownoise & Mental Theo : Ultimate Sex Track - Original Mix](#)」の卑猥な歌詞は何とまでは（以下自粛）である。以下ざっと大御所を追ってみると「[Neophyte : Hardcore Hooligans - Original Mix](#)」はギターの刻みが多少マイルドで聴き応えがある。「[Gabber Mafia : Gabber is not fashion - Original Mix](#)」あたりはまさに直球ハードコア、溜めて溜めての大爆発がたまらない。「[Angerfist : Terror Of My Speedcore - Original Mix](#)」はやや恐怖系寄り、金切り声や子供の声をフィーチャーして後半へと煽りまくる。映像に血と虫系のグロ成分多量にて重々ご留意されたいばかり恐怖系「[Evil Activities:Evil Inside](#)」は初っ端から飛ばし、途中の朗々としたボーカルが後半とのギャップを生む。こういふ真ん中恐怖系もいいものだが⁸³、東方アレンジ好きとしてはもう少し展開も欲しい。そこでこちら「[The Stunned Guys & Amnesys : Symphony of Sins - Original Mix](#)」は重いビートと程よい恐怖感で個人的に好みのバ

78. オリジナルの試聴がなかったので、原曲を早回しした「[Caramell : Caramelldansen - Speedycake Remix](#)」を張っておく。こちらがニコニコ動画で流行したバージョンである。

79. マキナ、ガバ、ロッテルダム・テクノ、スピードコア、テラーコアなどなどのサブカテゴリは割愛する。ブレイクコアはドラムンベースのところで項を設ける。

80. 現在体調が芳しくないとのこと。東方第1作目「東方硬核夜」より前の「エロコア」を見た瞬間思わず買ってしまった1リスナーとしてとても心配している。

81. この歌が余りにヒットしたため、当のJames Brown死亡という誤報まで流れた。

82. しかし私はこれを聴くとプロレスラー「ミスター・200%」こと安生洋二を思い出してしまうのだ…

83. 私は、血や虫や死体などは現実にあるものなので大丈夫なクチだが、幽霊系は一切ダメである。夏は私にとってつらい季節だ。「リング」「らせん」が流行った時はテレビを一切見なかった。あり得ないだろCMやり過ぎだろまじ怖いんだよクソが><

ランスだ。こちら恐怖感は少ない系、つい最近「[Rayden: Wild Dreams – Original Mix](#)」を聴いた時にはうっぴょーと飛び跳ねた。余り怖いのは、という方は「[Dany Kaos : Magnetic Fields](#)」は哀愁系、Cis-Trance が得意とするマキナというサブカテゴリ。激しいはずなのにじんわりと染み込む不思議さは癖になる。

以上やや怖い系、ハードめなものを聴いてきた。しかし、これらがハードすぎてついていけないという人も間違いなくいるだろう。そういう人たちのために、もう少しテンポを落とし、かつ攻撃的な歪みと不協和音の要素を排してキャッチーなメロディにした「みんな幸せになろうよ」というコンセプト、ハッピーハードコアの名曲を紹介していく。ハッピーハードコアは一時期流行ったがあっさり廃れてしまい、再度盛り上がるきっかけがないようだ。ちょっと淋しい⁸⁴。ハッピーハードコアといえば「[Scott Brown : Elysium Plus – Original Mix](#)」であろう。定番中の定番、今でもサンプリングの元ネタとしてよく使われるフレーズが満載だ。名曲「[Hixxy 『Visa : Fly Away – Hixxy Mix』](#)」はリミックスの腕が極上、ボーカルの伸びやかな声に何もかも忘れてしまえる。こちらよりミキサーの腕が冴える「[Brisk & Ham 『Bang! : Shooting Star – Brisk & Ham Remix』](#)」は、やや古めの音ではあるがサビで何も考えずにノっていける。Carpenters の定番曲が「[Nakatomi : Sing – Radio Cut](#)」でコミカルにカバー、これもPVと合わせて妙な能天気系である。大御所のリミックス「[Sy & Unknown 『Insight feat. Emily Reed : Digital Lover – Sy & Unknown Remix』](#)」は長いキャリアに培われた技術に今風の厚めの音を取り入れた。自然と身体が揺れてしまう。

この項の締めとして、ハードコアの派生的な、四つ打ちから離れた複雑なビートの刻みに、これでもかと効果をかけまくったグネグネウネウネのシンセサイザーで激しく踊る「ハードダンス」を紹介しよう。今売り出し中の「[Oyaebu 『Phil York vs BRK3 : Traffic – Oyaebu Remix』](#)」の激しい音遣いは何ともカッコいい。「[Oyaebu 『A*S*Y*S : Bassturbation – Oyaebu Remix』](#)」では、追って紹介するダブルステップばりにグネグネが決まっている。

[ブレイクビーツ]

ドラムの音に着目し、いろいろなドラムサウンドを分析・分解してバラバラにし、その中から自分なりに再構築して新しい曲を作り上げる手法だ⁸⁵。その手法による楽曲もそのように呼ぶ。とにかくドラムの刻みが複雑多岐、元の音源など彼方に消え去るレベルで再構築する場合が多い。そこにいろいろなシンセサイザーやギター、ラップ、ボーカルなどを乗せて完成である。

東方アレンジでは、このジャンルは単曲ではたまに見るが、全編統一コンセプトの作品はなかなかない。東方アレンジでブレイクビーツと銘打たれている作品のほとんどが、次項で説明するドリルンベースやブレイクコアである。つまり、ちょっとテンポ緩めのドラムで構成され、往々にしてファンキーな典型的ブレイクビーツ系で統一されたサークルは存在しないと言っている。まあこのジャンルの流行はだいぶ前に廃れ、またストリートでブレイクビーツ系のダンスを踊る「B-BOY」という文化と密接に関連しているわけで、どう考えてもオタクと相性が悪い。やむを得ないかもしれない。

とりあえず一般曲でブレイクビーツ系を概観する。まず何と言っても「[James Brown : Funky Drummer](#)」のドラムの進行に聴き覚えがある方は多いだろう。このドラムを元ネタとする曲は数知れず、この曲がなかったら世のヒップ

84. 幸せになりたい。

85. このように、既存の楽曲を分析・分解して自分なりに再構築、新しい曲を作り上げる手法を「サンプリング」という。サンプリングなどの技術項目についてはまた機会があれば。

ホップはまた違う形になっていただろう屈指の定番曲である。もうひとつ、その中に含まれるたった6秒ほどのリズムがその後のヒップホップを含むあらゆる楽曲に影響を与えた「[The Winstons - Amen, Brother](#)」も忘れてはならない⁸⁶。

その後紆余曲折を経て、現在の大御所は「[Rennie Pilgrem : Dubwa - Original Mix](#)」「[Rennie Pilgrem : Nu Era - Original Mix](#)」だとややファンキーな味付けが特徴。こちら「[Deekline & Ed Solo feat. DJ Assault : Bass To Make Your Booty Move - Original Mix](#)」も、ファンキーな色合いを残しつつもキャッチーで好きである。「[The Wiseguys : Ooh La La - Original Mix](#)」などは余りの古めかしさに初めて聴いた時には笑いを抑えきれなかった。ブレイクビーツがロックと融合したサブカテゴリ「ビッグビート」では、近時スマッシュヒットをかました「[HYPER : We Control - Original Mix](#)」がノリやすい。最新の「[HYPER : The End - Original Mix](#)」も同系統である。このHYPERと「[Beatman, Ludmilla : Ghost In The Shell - Original Mix](#)」が組むと、「[HYPER : The End - Beatman & Ludmilla Remix](#)」となり、ロックのテイストを残しつつグイグイと効果の効いたシンセサイザーの切り込みというカッコいい曲になる。こういうロックテイストにうねりまくったシンセサイザーを織り交ぜた今風ビッグビート系ブレイクビーツで、そろそろ東方アレンジが出てきてもいいのではないかと密かに思っている⁸⁷。

[ドラムンベース / ブレイクコア]

ブレイクビーツから派生した、ドラムのサンプリングによる複雑多様なビートに低音でゆったりと重厚なベースが響くのが特徴といえる。このうち、ドラムが多様を通り越して超高速化し、攻撃的なまでにぶっ壊れたリズムになると「ドリルンベース」というようになる。

ブレイクコアはハードコアからの派生と言われているが、こちらもサンプリングによる超高速で細かく複雑怪奇なビートが乱打される。しばしばビートもベースも何もかもが歪んでおり、ノイズも多く、ドリルンベースと並んで発狂的。くたくたに疲れる音楽かもしれない。

東方アレンジでドラムンベースアレンジはそこそこ見受けられる。単曲で私の好みを挙げると「[dBU music : 弾奏 結界シリーズ 夢幻夜想曲 ~ Eternal Nocturne](#)」の8曲目「Voyage1969」はドラムンベースアレンジである。「[C.S.C → Iuv : 文々衛星](#)」は一部がドラムンベース、「[PHOENIX Project : Up to Death](#)」⁸⁸は大半がゆったりめのドラムンベースアレンジだ。

激しい方向に行くと、電子音楽であれば何でもやってしまうお馴染み「[荒御霊 : 拘束人形 ~ the Breakdown of Alice](#)」は、だいたい全編がノイズ多めのドリルンベース / ブレイクコアだ。頒布された時には一部の好き者が涎を垂らした「[蟲と東方とミュージックコンクレート : 蟲と東方と毒殺ミルク](#)」⁸⁹はドリルンベース / ブレイクコアのぶっ壊れっぷりが楽しい。また、DJバトルという形式を模した「[荒御霊 VS. FRAGILE ONLINE : BREAKCORE DJ BATTLE](#)」⁹⁰は、Fragile Onlineのドリルンベース対荒御霊のブレイクコアという突風対轟風のような応酬がなかなか楽しめた。

一般の中でもまずは聴きやすいところから、大御所「[London Elektriccity : Billion Dollar Gravy - Original Mix](#)」はドラムンベースのお手本のような整った作品である。こちらも「[Adam F : Circles - Original Mix](#)」は、しっかりとしたメロディにドラムの刻みがしっくりはまる。宮本武蔵をタイトルに和風太鼓と刀の音を大胆にフィーチャーした

86. このブレイクビーツを「Amen Break」と呼んでいる。[Amen Break 解説ページ](#)。

87. HYPER もセールス的には悪くないし、どうですかねアレンジャーの皆さん。

88. 公式サイト Discography 工事につぎ、東方同人 CDWiki 該当ページ。

89. [公式サイト](#)で無料配布中。

90. 特に10曲目「水没ピアノ」は屈指のブレイクコアアレンジだと個人的に思う。

「[Photek : Ni Ten Ichi Ryu - Original Mix](#)」は、音の隙間からいろいろ想像が広がっていく。そして忘れてはいけないドリルンベース元祖、最近はやったり系が多い「[Squarepusher:Hello Meow - Original Mix](#)」は一流のベーシスト、そのテクニックは見ごたえがある。最近では「[Pendulum : Slam](#)」⁹¹がロックとドラムンベースの融合を試みて人気を博している。

さあ激しいドラムとビートの登場だ。若きころに素晴らしいドリルンベースを何曲も作り上げた「[μ-Ziq : Hasty Boom Alert - Original Mix](#)」、最近はやって紹介するエレクトロニカ系ゆったりめが多いようだ。またこれも若きころの「[Aphex Twin : Vordhosbn - Original Mix](#)」はドリルンベースの帝王と言っている。上でも紹介した美しくも無邪気なメロディにぶっ壊れたドラムが狂気的な「[Aphex Twin : Girl/Boy Song - Original Mix](#)」は屈指の名曲。敬意を表して、というより私が大好きなのでもう1曲「[AFX『DJ Pierre : Box Energy remixed by AFX』](#)」⁹²の疾走感とはまらない。もうひとりでくらい挙げておこう。2008年以前の[The Flashbulb](#)、例えばアルバム「[The Flashbulb : Flexing Habitual](#)」は哀愁系ドリルンベースの傑作だ。

ブレイクコアは何と言っても「[Venetian Snares : Integraation - Original Mix](#)」一択だろう。ブレイクコア代表とするに遜色ない華麗なビート遣いのセンスは圧巻。先の読めない展開に呆然としてしまう。最近の作品も「[Venetian Snares : Miss Balaton - Original Mix](#)」とまだまだバリバリである。

とはいえ大御所ばかりに頼っていてはいけない。そこで私が好きな「きれいで無邪気なメロディにぶっ壊れたドラム」を軸に「[The Ghost of 3.13:I'll Be In My Bedroom - Original Mix](#)」⁹³はお気に召すだろうか。ルーマニアの若手で、透明感あるシンセサイザーのメロディにくしゃくしゃに壊れたドラムが何とも言えない幻想を引き起こす。これからもどんどんいい曲を作っていってほしい。

[ダブステップ]

2ステップに見られる1拍目と3拍目の強調、ブレイクビーツそしてドラムンベースを軸にいろいろなジャンルの美味しいところを取り込んで、それにダブをかけてブワブワギューギューにうねったベースを基調とする、やや遅め、というか普通は「ドンドンドンドン」と打たれるキックドラムが「ドン、ドン」と半分しか打たれない⁹⁴ので遅く聴こえるクラブ系ミュージックである。いったい何を言っているのか分からないと思うが、私も何を言っているのか分からない。もはや聴いてもらう方が早いということで、初めて聴いた時に「まさかゲーム主題歌がこんなにダブステップしているとは」と驚いた、PSPゲーム「GOD EATER BURST」のオープニング・テーマ「[Alan : Over the Clouds - BURST Mix](#)」が明確にこれである。

2003年ごろからロンドンを中心に世界中に広がっていった比較的新しいジャンルであるが、最近はややくブームも一段落したようである。

東方アレンジでダブステップはまず見かけない。「[Take it Happy!! : Underefined](#)」の4曲目「[scarlet heaven of Delays](#)」が明確なダブステップであるほかは、頒布されたCDにそれを謳うものは見つけれなかった。ただ、イベント頒布でなくニコニコ動画で東方アレンジアルバムを公開した「[ジェリコの法則 : Dirty Sounds Domination](#)」の

91. 2分半すぎから「Slam」が始まる。

92. リンク先CDの2曲目。AFX = Aphex Twinを含む前衛的なテクノミュージシャンによくあることだが、曲のタイトルがしばしばいい加減である。まあAphex TwinことRichard D.Jamesは「ぼくがリミックスをやる曲なんか、ひとつ残らずヒドイものばかりだもん。特に日本人のはどれも本当にひどかったな(笑)。でも、そういうヒドイ曲をリミックスするのが好きなんだ。嫌いなものを気に入るように作りなおすのはぼくにとってもチャレンジだからね。だから自分の好きな曲のリミックスはやらない。好きなものはそれ以上いじる必要はないから。」とぶっちゃけてしまうお茶目さんである。(Aphex Twin Interview : CROSSBEAT95年5月号)

93. 所属レーベルの[Sociopath-Recordings](#)アーティストページからフリーダウンロード可能という大盤振る舞いである。

94. ハーフステップという。これでダブステップ独特のタメができる。

4 曲目「[Like a shipwreck](#)」は、強烈なブワブワのダブステップである。原曲メロディをここまで残せるとは思っていなかった。これからダブステップアレンジが増えていってこないかな、と期待している⁹⁵。

一般のものを見ると、まず「[Skream : Midnight Request Line – Original Mix](#)」は、ダブステップの時代を切り開いた初めてのヒット。最近では「[Skrillex : Scary Monsters And Nice Sprites – Original Mix](#)」⁹⁶ がド派手な効果をかけまくったブリブリのベースで大人気だ⁹⁷。「[Downlink : Ignition – Original Mix](#)」はゴリゴリと矢継ぎ早に繰り出されるベースラインに押し切られてしまう。先に紹介したエレクトロ・ポップの「[La Roux : Bulletproof – Original Mix](#)」をダブステップにアレンジした「[broken haze『La Roux : Bulletproof – broken haze Remix』](#)」⁹⁸ は、原曲とは違った楽しさを与えてくれる。

これらを聴いてきて「ちょっとうるさい」と思った方には、上記のタイプが一段落したところで現れた新しいダブステップ「[Burial : Archangel – Original Mix](#)」をおすすめしよう。しっとりと美しいメロディが心地よい。そしてこちらも新しい「[Shackleton : Blood on my Hands – Original Mix](#)」はアフリカンなじんわり系ダブステップだ。こちらへんになると余りにジャンル内で違いすぎてどこがダブステップなのかちょっとよくわからなくなってくるが、一応ハーフステップと強調部分そして低音が強調されたベースラインは生きている、と思う。

クラブでの人気は一段落してしまっただが、これから東方アレンジにダブステップが入ってくることを願いつつ、そこはかたなく和風ダブステップな「[Shock One:Adachigahara's Theme – Original Mix](#)」を紹介してこの項を締める。[安達ヶ原](#)とは鬼の棲み家、怪しげな空間とうねるベースがこのほか後ろを見てはいけなような錯覚を起こさせる。

[ヒップホップ / R&B・ソウル]

もはや多様性を乗り越えて何でもありになってしまった感もあるが、ここでいうヒップホップとは、ダンサブルな電子音楽打ち込み系トラックに乗せて何らかのメッセージを込めたリズムミクナラップが韻を踏んで進行していく様式というところで勘弁願いたい。ラップがメインの楽曲をイメージしている。よって、歌詞の途中でラップが入るもののボーカルの歌がメインのものはここに含まれない。

R&B は、現代ではやはり電子音楽打ち込み主体のトラックにメロディアスで哀愁漂う歌唱を重視した形式をそれとしよう。現代の日本人にとっては、平井堅、宇多田ヒカル、MISIA あたりが分かりやすいだろう⁹⁹。ソウルは、その中でもよりゴスペル系の影響を残した情熱的で即興性に富んだ黒人による黒人のための音楽として、R&B のサブカテゴリーに置くことにする¹⁰⁰。

一般的にはそこそこ認知されているヒップホップであるが、東方アレンジでは単曲はともかくアルバム全編統一となると極端に少ない。「[魂音泉 : Chill ★ Now](#)」を代表とする「[魂音泉](#)」の一連の作品くらいである。これだけ文化が混然としている今の現代日本でもなお、ストリート系やら何やらがオタクと相性が悪いということなのだろうか。この結論には余りしっくりこない。ひとえに MC の人員不足に尽きるような気がしないでもない。

東方 R&B アレンジとなるとさらに少ない。「[Sound CYCLONE : feat.RIZE](#)」に辛うじて R&B っぽいものがあるほかは、ジャズっぽいものはいくつかあるが、明確な R&B アレンジは見かけない。歌唱重視や即興性というのはさすがに同人

95. 以下で紹介する Skrillex 系と Burial 系でそれぞれ誰かお願いします m(_ _)m

96. 途中で差し込まれる金切り声は、ご存知キーボード・クラッシャーの「Oh my god!」のフィーチャリングである。何という小ネタ。

97. まさかダブステップで youtube 再生 2700 万を超えるとは、Skrillex (スクリレックス) 恐るべし。

98. リンク先の公式 SoundCloud でフリーダウンロード中。

99. 和田アキ子と書きかけてやめた。

100. R&B とソウルの歴史を紐解くと、少なくともこの稿の半分くらいは紙幅が必要だ。

の世界では厳しいのだろうか。

ヒップホップ好きとしては勢い込んでまず海外のものから、と紹介していきたいのだが、我々が東方アレンジで聴いているのは日本語ラップである。泣く泣く割愛しまくって古いのは3つに絞った。伝説のラッパー「[2Pac : Changes – Original Mix](#)」はベタでも何でもいいものはいい的な、甘いメロディに厳しい歌詞が忘れがたい。「NAS : NY State of Mind – Original Mix」を含む「[NAS:ILMATIC](#)」は名盤中の名盤。長いキャリアでも軸がぶれない「[Rakim: When I B On Tha Mic](#)」は、いつ見てもスタイルから何からしっかりヒップホップしていると思う。

そして近時の代表として、もう真正面でも構わない「[Eminem feat. Rihanna: Love The Way You Lie](#)」はドメスティック・バイオレンスの悲哀を歌った曲。そもそもエミネム自身がDVで家庭をめちゃくちゃに壊した。そしてリアーナはDVの被害者、暴力を受け顔面が見る影もなく歪んだ写真は記憶に鮮明だ。使い古された言い回しだが、この歌にはリアルが込められている。

そういうところに着目してしまう性分なため、日本でここぞとばかりにギャングスタ系の女だの金だのを歌われても私はピンと来ない。もっといろんなものがあったいいはずだ。例えば「[スチャダラパー feat. 小沢健二: 今夜はブギー・バック \(smooth rap\)](#)」は、当時のちょっとスカしたようにかっこつけた日本の若者が浮かんでくる。「[Lamp Eye : 証言](#)」はアンダーグラウンド的な主張が強い。さらに私のテクノ好きが加わると「[THA BLUE HERB : 知恵の輪](#)」は、テクノ風のトラックにストイックな表現で張り詰めた独特の間で吐き出されるラップが鮮烈だ。同じく THA BLUE HERB のMC が参加した「[刃頭 feat. ILL BOSSTINO : 野良犬](#)」も言いようのない緊張感。一転して「[I-DeA feat. 降神 : 暴風雨](#)」は、志人のまるで詩を読んでいるかのような自由なラップが不思議だ。

そして初めて聴いた時は呆然とした「[Nujabes feat. Shing02 : Luv\(Sic\) pt.2](#)」のジャジーな空間をヒップホップ最後の締めとしたい。nujabes こと瀬場潤¹⁰¹の余りにも早すぎる逝去の報に肩を落としたのは、もう1年半も前のこと¹⁰²。

R&B やソウルは、ポピュラーなシーンでは十分に一般に膾炙しているといえる。冒頭に挙げた日本人の歌手はそれぞれ楽曲のセールスも一流、正統派かどうかはともかく、R&B が日本人に合わないということはない。海外に眼を移しても、日本人でもかなりの人が知っているだろう「[James Brown : Sex Machine](#)」「[James Brown : I Feel Good](#)」は説明の必要がない偉大なソウルの帝王、「[The Earth, Wind and Fire : September – Original Mix](#)」はかつてのクラブで定番中の定番、聞き覚えのあるサビだろう。今風になると「[Joe: All The Things \(Your Man Won't Do\)](#)」や「[R. Kelly : Ignition](#)」の甘い声が心に染みる。女性シンガーなら今をときめく「[Mary J. Blige : Be Without You](#)」が定番。こんな感じで、というのは余りに酷だろうが、R&B アレンジだってもっともっと増えていいはずだ。

[レゲエ]

ジャマイカ産、ドラムとベース、パーカッションとリズムパート担当のギターによる南国情緒香る独特な2拍目と4

101. 日本でもよく知られているファッションブランド「コム・デ・ギャルソン」のバリ・コレ音楽ディレクターを務めたこともある。
102. そして Luv(sic.) シリーズでの nujabes と Shing02 の最後の共作「[nujabes feat. Shing02 : Luv\(sic.\)pt.4](#)」がついにリリース。ひたすらにやさしいバックトラックとラップ。

拍目を強調したリズムに、しばしば管楽器パートがアクセントをつけ、ボーカルは独特のテンポで何らかのメッセージ性を伴う場合が多い。文章による説明に限界を感じる瞬間である。とにかく「レゲエの王様」ボブ・マーリーの何か、例えば「[Bob Marley : Three Little Birds](#)」を聴いてもらった方が本当に早い。これがレゲエである。

東方アレンジでレゲエは見かけない。統一されたアルバムはもとより、単曲でもダブステップと同レベルで少ないようだ。IOSYS 初の東方アレンジアルバム「[IOSYS : 東方風櫻宴 ~ Phantasmagoria mystical expectation](#)」の4曲目「Former class-A war criminal」は、ダンスフロア寄りの硬めなレゲエである。これ以外に著名なところからは明確に出されていないようだ。これも MC 不足によるのだろうか。

日本では今クラブでレゲエがそれなりに流行っていて、「乙女ハウス」¹⁰³のみならず「乙女レゲエ」という用語もあるらしい。まずはそれから離れた王道系レゲエとして「[Aswad : Best of My Love](#)」は、サビの部分聴いたことがあるかもしれない。また、90年代半ばに強烈な旋風を巻き起こした「[C.J. Lewis : Sweets for My Sweet](#)」¹⁰⁴も甘いボーカルが印象的だ。さらに正統派で「[Sizzla : Thank You Mama](#)」は歌詞で泣かされる。信条に基づいた主張が激しい「[Capleton : Someday](#)」¹⁰⁵のスタイルは力強く朗々とメロディアスだ。

日本では何よりも日本レゲエ史上初のオリコン1位を叩き出した「[三木道三 : Lifetime Respect](#)」が記憶に残る¹⁰⁶。最近では、「湘南乃風」¹⁰⁷のメンバーである「[HAN-KUN : Don't Give Up Yourself!](#)」¹⁰⁸は、シンプルで直球な歌詞が人気だ。「[FIRE BALL : Teardrop](#)」の堂々たる反戦歌はボーカルの芯の強さも相俟ってやや重ため。女性では「[AKANE : 7 Colors](#)」の明るい曲調にしっかりと声質が前向きなメッセージを歌う。

そして同じくジャマイカで生まれた「スカ」を便宜的にここで紹介しておく。しばしばバンド形式で、南国系のリズムと管楽器パートも備えながら、2拍目4拍目の裏打ちがかなり強調されたジャンルである。東方アレンジではやはりなかなか見られない。その中で作品タイトルがど直球なまでに清々しい「[EcN : 東方スカパラダイスオーケストラ](#)」は全編通して気持ちいいスカアレンジである。ほかには「[音不知](#)」の作品の一部に見られる程度だろう。

一般的にスカ・サウンドといえば「[The Specials : Too Much Too Young](#)」¹⁰⁹あたりだろうか。もちろん皆さまご存知の[東京スカパラダイスオーケストラ](#)は、日本で著名なスカ・バンドである。

[ミニマル]

単純な反復のリズムをメインにシンセサイザー等による味付けがほんの少し、音数を極限まで減らして基本的に同じリズムが延々と繰り返される構成の電子音楽である。ひたすらに単調なので一般的にはほとんど認知されていないジャンルだと思われる。ポイントポイントで思い出したようにシンセサイザーなどの飾りが入り、またじわじわとリズムが揺らいでくるところに展開を感じ、単純な反復に陶醉を感じることで踊ることができる。その中でも、特にビートなどの音遣いが高速で、かつ歪みやノイズが含まれる激しいものをハードミニマルと呼ぶ。

103. カフェ・ラウンジの項で触れる。

104. 公式試聴が見当たらず「1994年発売とか大昔だからしょうがないよなあ」と思いつつネットをうろついていたら、今 C. J. Lewis で [Universal Japan に所属](#)して J-POP のレゲエ風カバー作ってるのね。2008年に復帰して「GReeeeN: KI-SE-KI」をカバーして、その後キマグレンや SKELT 8 BAMBINO や、そして今年はどうとう少女時代まで。あんたかつてこの曲で UK シングルチャート3位をもぎ獲っただろ。イギリスだけに留まらずオーストリアシングルチャート4位、オランダシングルチャート3位などなど世界中でヒットかましました。この曲とその後3枚くらいは日本でもバリバリ流されてただろ… いやカバーやりたきゃそれでいいんだけどさ。かつて間違いなくスターであったミュージシャンの現実をまじまじと見て、まだ捨てずに持っていたアルバム「Dollars」を眺めながら何かしんみりため息ひとつ。

105. レゲエではしばしば同性愛者差別の歌詞が乗せられ、それに同性愛者団体が抗議するケースが頻発しているようだ。2010年もケイブルトンは同性愛者団体の抗議によりアメリカ公演のいくつかを中止した。

106. [三木道三スーパーベストのネタ](#)も記憶に残る。実際にはこのようなベスト盤は出ていないですよ。

107. 湘南乃風はキャッチーすぎてレゲエ色が薄すぎると個人的に思っているの、レゲエミュージシャンとして紹介はしない。

108. HAN-KUN はメッセージ性がそれなりに立っておりレゲエしていると思う。「HAN-KUN : Touch the Sky」はさすがにレゲエというジャンルには入らないであろうが。それにしてもこの頭に巻いたタオル、前が見えないのではないかと他人ごとながら心配である。

109. 正確に言えばパンク・ロックのリズムとスカが融合した「2-Tone」であろうか。細かいことを調べ始めたら切りがない。

東方アレンジでは全くと言っていいほど見かけない。超がつくレベルでどマイナー、しかも一般に極めてとっつきにくいジャンルゆえにしかたがない。東方アレンジにミニマルな世界を、その光明として「[お湯かけ 3 分](#)」(mixi) が最近出し始めた、ストイックなハードミニマル多めのほぼ全編ミニマル系アレンジは貴重である。需要がないなんてことは言わずに、もうちょっと増えてもいいと個人的に熱望している。

90 年代後半から 2000 年近辺にハードミニマルは絶頂期を迎えた。屈指の名曲「[Jeff Mills : The Bells - Original Mix](#)」¹¹⁰ は、今でもクラブでかかると歓声が上がる。「[Surgeon : Magneze - Original Mix](#)」は硬すぎるビートとぐねぐねノイズな「音」がこれでもかと迫り来る佳曲。「[The Advent : Blimey - Original Mix](#)」は少し新しめ、轟音がいつの間にか身体を揺らしている。

余りにハードすぎた反動か、これらが廃れた後にはコロコロカラカラとシンプルすぎるミニマルが現れてきた¹¹¹。その世界を自ら作り上げ、そして終わらせてしまった、いやまだ終わってはいないかもしれないがもはやこの人を描いて語ることができない「[Richie Hawtin : The Tunnel - Original Mix](#)」¹¹² はグワングワンと包み込んでいつの間にか時間が過ぎる。そしてもうひとり「[Ricardo Villalobos : Fenlow - Haze 2011 Dub Mix](#)」¹¹³ は、類まれなセンスで細かい音の粒をつないでいく。この二人がミニマル界の 2 大巨頭である。「[Edit Select : Recluse - Original Mix](#)」の沈み込んでいくビート、はたまた Richie Hawtin の別名義「[Plastikman : Spastik - Original Mix](#)」は最初から最後までドラムだけでカラカラと 9 分間、その強弱と揺らぎで構成された珠玉のミニマルである。

まあ Richie Hawtin と Ricardo Villalobos の二人を紹介してしまうと他をおすすめすることが難しくなってしまうのだが、それでも敢えて、しかも日本人女性「[Akiko Kiyama : Hakobi - Original Mix](#)」のダークでシンプルな、しかし沈みすぎることのない硬質な音のスキマを楽しんでほしい。

[アンビエント / チルアウト]

アンビエント＝環境音楽と言っていいだろう。ある環境を作り上げることを目的にした音楽の総称である¹¹⁴。また、アンビエントのサブカテゴリというわけではないが、クールダウン、リラクセスさせることを目的¹¹⁵とした音楽がチルアウトである。しばしば CD ショップなどで一緒にたにされているのは、両方ともに「日常系または自然回帰系ゆったりリラックス」を目的とした作品が多いからだと思われる。

以上を踏まえた上で、両者ともに基本的に静かなリラックス系の音楽を念頭に置いて以下稿を進める。需要はそこにあり、東方アレンジもそちらに偏っているからである。

東方アレンジで明確にアンビエントの方向性を目指した曲はそれほど多くないように思える。全編和風アンビエント、追って紹介するエレクトロニカ力的でもある「[Dust Box 49 : ノリノユメ](#)」は日本人にはとてもしっくりくる。前衛的な「[蟲と Lumpy とミュージックコンクリート : 蟲と東方と青酸ソーダ](#)」¹¹⁶ はノイズ多めのアンビエント風味。「[荒御霊 : 旅行 ~ Soundscape](#)」は、小説のサウンドトラックとして旅情を醸し出すためにゆったりとした曲調で統一されたアンビエント / チルアウトである。

110. 元外科医という異色の肩書を持ち、ターンテーブル 5 台をいっぺんに扱ってレコードを次々と切り替える変態的 DJ プレイをかつては見せていた。「[Mix-Up vol.2](#)」と「[Exhibitionist](#)」は今聴いても本当に素晴らしい。現在は何か宇宙に行ってしまったらしく、若いころのパキパキなサウンドはどこへやら、神秘的な曲調のものが多く。

111. クリック系と呼ばれている。上述した「テック・ハウス」と区別がつきにくい。

112. 「[DE9: Transitions](#)」からのシングルカット。このホウティン先生の DVD は、このジャンルが好きなら入手必須。DVD 版では実に 180 以上の楽曲を音単位で分析、分解そして再構築し、全く新しい楽曲に仕上げてしまった。100 分間のシンプルな反復とじわじわとした展開は、音が少ないはずなのにまるで洪水のようにリスナーを包み込む。テクノというジャンル全体で見ても屈指の名ミックスだと信じている。もし求めるならば、決して CD のみを買ってはならない。CD は収録限界が 80 分、DVD の 100 分と収録時間が違うのだ。日本酒通が昂じてベルリンに日本酒バーを作ってしまったほどの、私が大好きなテクノミュージシャンのひとりである。

113. 「[Dexter - Original Mix](#)」「[Minimoonstar - Original Mix](#)」の公式試聴がどこにもなかったのでやむを得ずこちら。特に後者は 1 曲 32 分弱基本反復とかちょっと脳味噌がどこか飛んでったとしか思えない素晴らしいさである。

114. 何も静かな環境を志向するのみならず、例えば熱狂的な環境を作りたければアツい音楽を流す必要がある。これも一種のアンビエントである。

115. 特にダンスフロアで踊った後に火照った身体をクールダウンさせる目的を志向する。

116. [公式サイト](#)で無料ダウンロード配布中。

アンビエントといえば何と言ってもその創始者である「[Brian Eno : An Ending \(Ascent\) – Original Mix](#)」を挙げなければならない。空港でかけることを目的として作られた「[Brian Eno : Ambient1|Music for Airports](#)」は、聴こうと思えば美しいメロディが耳からしみ込んできて、聴き流せば全く気にならないというアンビエント屈指の名作だ。日本が誇る「[坂本龍一『Ryuichi Sakamoto, Fennesz : Haru – Original Mix』](#)」は美しい、けれど少し癖のあるアンビエントをいくつも世に送り出している。また、ドラムンベースの項で紹介した Aphex Twin は「[Aphex Twin : Selected Ambient Works 85-92](#)」¹¹⁷ というアンビエント名盤も世に送り出している。

最近の私のお気に入りには、日本人なら「[Arc of Doves:Quasar – Original Mix](#)」は、ビートルズというわけでもない、心持ちダブっばいゆったりとした透明な音が全てを忘れさせてくれる。より環境音楽に近い海の情景を描いた「[Coral Chiller : Atolls – Original Mix](#)」は、波の音を軸に、しかし自然音とは違ったリラックスを与えてくれるだろう。

[カフェ・ラウンジ / エレクトロニカ]

カフェ・ラウンジとはそのものずばり、カフェやラウンジのスペースで BGM としてかけられる類の音楽をいう。ジャズっぽかったりボサノヴァっぽかったり、基本おしゃれ系の余りうるさくない系統の音楽がメインである。

エレクトロニカはなかなか説明しにくい。電子音楽の総称であったり、はたまたダンスには適さない非クラブ系電子音楽のことを指したりと、定義から混迷している。歴史や意義などを語ってもしかたがないので、ここは私の独断で「ビートがない、ノイズまみれなど非クラブ系の踊りにくい電子音楽で、テンポが基本やや遅め系」とする。カフェ・ラウンジと組み合わせられている例が多いのは、基本的にそれほど激しい音楽ではないからだ。

東方アレンジでこのジャンルは結構多い。「[flap+frog](#)」の音が少なめで透明感のあるエレクトロニカは、同梱されているジャズと合わさってカフェっぽくて心地よい。何でも作れる「[荒御魂:Purple Purpose](#)」は、全編でシンセサイザーが様々に転がったり奏でたりする実験的で興味深いエレクトロニカ。「[N-tone : やさしくひかるかえでのき](#)」のエレクトロニカはとても優しい。上記アンビエント / チルアウトでも紹介した「[Dust Box 49 : ノノレノユメ](#)」は和風、同じく「[蟲と Lumpy とミュージックコンクリート:蟲と東方と青酸ソーダ](#)」はノイジー系エレクトロニカ、「[schwarzwald: fairyland excursion](#)」はやや暗めで不気味な展開が印象に残っている。

カフェ・ラウンジ系で有名なミュージシャンは、甘いメロディで女性にも人気の高い「[FreeTEMPO : Montage – Original Mix](#)」¹¹⁸ であろう。「[FreeTEMPO『I-Dep : Rustlica – FreeTEMPO Lounge Mix』](#)」のスムーズに耳に入ってくる反復するフレーズが身体をゆったりと揺らす。「[Funkestra : Un Bom Motivo – Original Mix](#)」は、ボサノヴァ風味で力を抜いてノれるところに後半オルガンが軽快に駆け巡る展開が面白い。「[Kaleidoscopio : Tem Que Valer – Original Mix](#)」は、軽快なボーカルがおしゃれでノれるブラジルのボサノヴァだ。

エレクトロニカ代表と言えば「[Autechre : Dropp – Original Mix](#)」のどこへ行くのかわからない電子音の連なりは、初っ端はなかなか聴きにくいだろうが、慣れれば見事の一言に尽きる。もうひとつエレクトロニカ巨匠の「[Oval : Textuell](#)」¹¹⁹ は、ほぼ雑音の中にメロディがぼつりぼつりと生まれては消えていく稀有な作品だ。「[Telefon Tel Aviv : Sound In A Dark Room](#)」¹²⁰ はメロディアスなトラックに交錯するノイズが幻想的。きれいな系なら「[I am Robot and Proud : Good Sleep](#)」はポップな音遣いがとても暖かくやさしい。この時にこのジャンルを語るなら外す

117. 1 曲目「[Aphex Twin : Xtal – Original Mix](#)」は名曲だ。

118. つい最近 FreeTEMPO としての活動にいったんピリオドを打ち、本名の半沢武志で再始動した。日本人である。基本的にハウス系で、おしゃれでセクシーな甘いフレーズのハウス系音楽を指して言われる「乙女ハウス」の代表としても挙げられる。

119. 所持する音源 CD の盤面をマジックで無造作に塗って、それにより生じる電子的雑音を拾って曲を構成する手法だそう。90 年代後半から行われていたとは思えない前衛っぷりである。

120. ユニットのひとり Charlie Cooper が 2 年ほど前に亡くなってしまった。早すぎる…

ことができない「[Rei Harakami:june](#)」¹²¹ は、どこか懐かしいメロディに独特の空間的な揺らぎに聴き惚れてしまう。皆さまが一度は耳にしたことがあるだろうゲームミュージック、特にファミコン、ゲームボーイなど 8bit 系のチープなピコピコサウンドをチップチューンとしてカテゴライズする。ジャンルというよりも、その音を使って今まで紹介してきたジャンルを横断して楽曲を作り上げるイメージである。

チップチューン／ゲームミュージック

ゲームミュージックは説明の必要もあるまい。東方 Project 原曲は、今まで挙げてきたどのジャンルにも属せずに、ゲームミュージックとして把握するのだ。

東方アレンジでのチップチューンは単曲ではちらほら見かけが、アルバム全編統一として「[フランソワさんのよもぎ畑](#)」と「[宇部ソフトウェア技術研究所](#)」の二大巨頭によって切り開かれていると言っていいのではないかな。かなり古い時期からずっと一貫してチップチューン・サウンドのアレンジだ。

この手の音遣いで定評あるエレクトロ・ポップ系ユニットが「[YMCK : Starlight](#)」である。昔から優しく、時に鋭くチップチューンを日本に響かせてきた。クラブ系では「[bit shifter : Easy Prey - Original Mix](#)」と「[Nullsleep : Valentine Final - Original Mix](#)」のこれまた二大巨頭と言っていいだろう。珍しいところでは「[Quarta 330 『Kode9 : 9 Samurai - Quarta 330 Remix』](#)」がダブステップの名曲をその特徴を活かしつつチップチューンにしているのが面白い。

この稿でゲームミュージック自体を紹介しても目的からして余り意味がない。そこで「ゲームミュージックを演奏する人たち」という視点からいくつか見ると、まずは何を措いても我らが神主が所属していたタイトー、「DARIUS」などを擁するサウンドチーム「[ZUNTATA](#)」が挙げられる。そしてこちらも全世界中で大人気「悪魔城ドラキュラシリーズ」などを擁する「[コナミ矩形波倶楽部](#)」、さらには日本ファルコム「イースシリーズ」などを擁する「[J.D.K. BAND](#)」などが挙げられる。

そしてその「イースシリーズ」のうち「イース II」で、1800 人以上の応募者の中から見事「ミス・リリア」に輝いた「[杉本理恵](#)」が歌うファルコムレーベル所属時代の楽曲は、私の永遠のアイドルソングである。もう 10 年以上前に芸能界を引退してしまったが、CD はデビューアルバムの「LILIA」から全て所有¹²²、アイドルアイドルしたトラックにアレンジされた日本ファルコム「イース II」や「ソーサリアン」の名曲に、少し不安定だが愛らしく、その時々感情が如実に浮かび出る声に乗って不思議な世界を紡ぐ。最高である。

121. ついこの間の 7 月に早すぎる逝去、ニュースでも一報が流れ、一瞬私の時は止まった。nujabes も DJ KAGAMI も Rei Harakami もこの世にいない。余りの無情に言葉もない。

122. wav へのリッピングとバックアップも完璧である。

おわらない

ここまで気の向くままに書いてきたら何といつの間にか 23 ページ、前回のエッセイは 8 ページだったのに、とんでもないボリュームになってしまった。そして今現在、このエッセイのレイアウトを担当してくださるデザイナー様をすさまじい勢いで待たせている。つまり締切を大幅にぶっぎっている¹²³。それなのにエッセイを 1 回で終わらせることができず、残ったジャンルは後編へ持ち越しという体たらく。皆さま大変申し訳ない。次の予定は第 9 回例大祭、それまでにしっかりと「ロック」「クラシック」「ジャズ」「民族」あたりをさらに聴き込んでおく。どうかお待ち願いたい。必ずや皆さまを満足させ、平々凡々な一般人にしてみせる¹²⁴ ことをお約束しよう。

などここで高々と表明されたこの決意を読むのが私とデザイナー様、そしてこの長大な文章の校正をお願いした人¹²⁵ だけに留まらないことを切に祈りつつ、次回【東方アレンジ音楽と一般音楽の境界 - 後編】へ、またしばし音楽の世界に浸ろう。それでは皆さま、また来年の春にお会いしよう。

A Suivre.

123. ただいま 2011 年 9 月 8 日午後 1 時 03 分、これから CD の盤面印刷をして、データ集の最終調整そして恐怖の CD 焼き焼き作業がまるまる控えている。ちょっとこれ本当に間に合わないんじゃないかな。

124. この稿の目的である。お忘れなきよう。

125. 次もよろしく！